

ブ
ー
ス
大
將
著

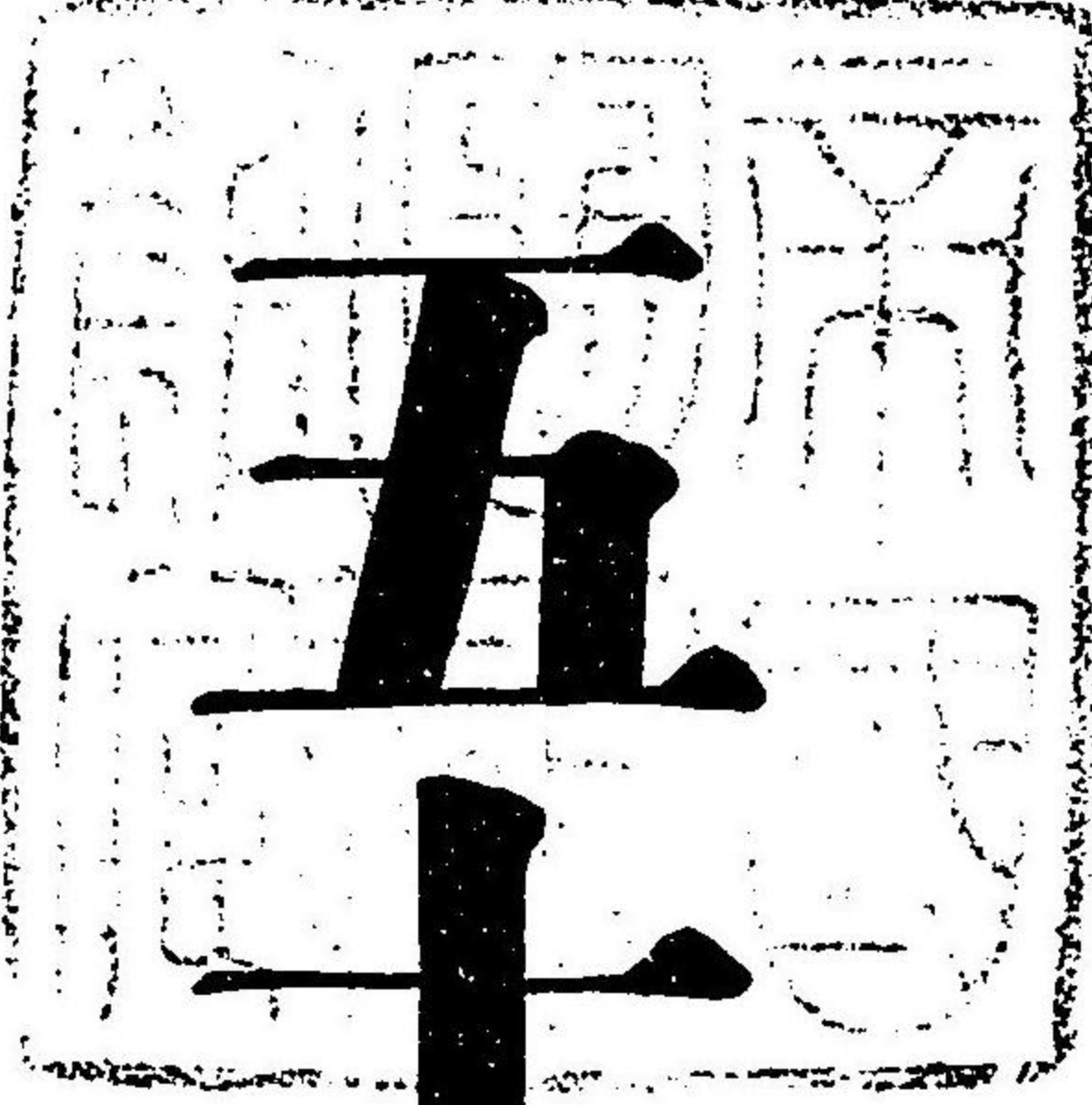
五
十
二
文
集

東
京

救
世
軍
日
本
本
營

525-122

ブ
ー
ス
大
將
著

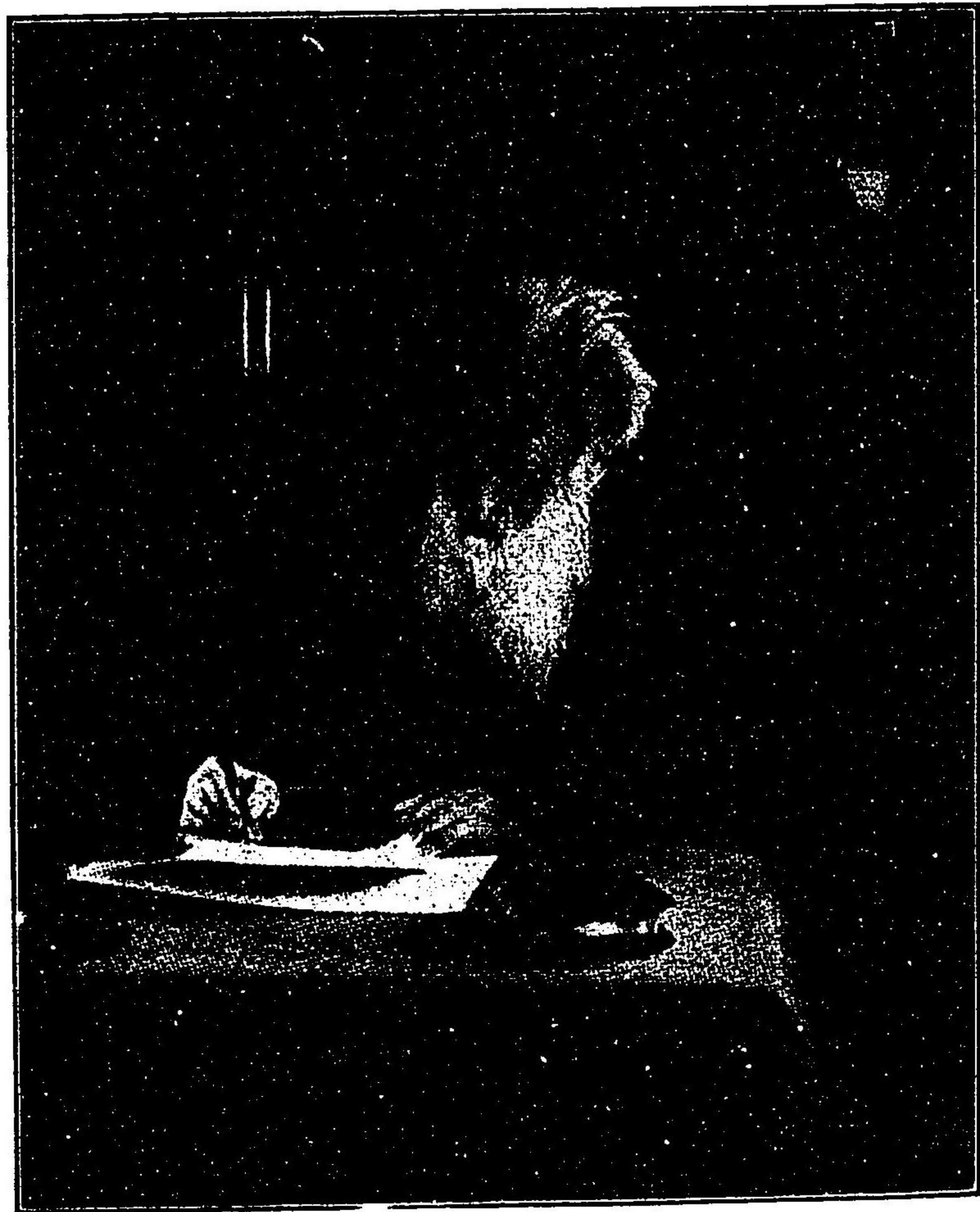


五
十
二
文
集

明治
43.10.18
内交

東
京

救
世
軍
日
本
本
營



將 大 ス ー プ

PREFACE.

It is with the greatest pleasure we issue this 1st edition of a new book, entitled "Fifty two Articles," by General Booth.

These were written principally for the educating and benefitting of the soldiery of the Salvation Army throughout the world, and contain to a large extent the fundamental principles and teachings so helpful to all.

We commend it to the careful study of all Christians, especially those who are actively engaged in evangelistic and aggressive work.

The book is launched in the 82nd. year of the General's life, 65 years of which have been spent in service for God, hence it is the production of a man with a vast experience, and who has accomplished a mighty work for God and man throughout the world.

HENRY C. HODDER,
Commissioner.

Tokyo.
September 1910.

序（譯文）

我等は最も大なる喜を以て、此ブース大將著「五十二文集」第一
壹版を發行するものである。此等の文は、主として世界各國に
在る救世軍々人を教育し、裨益せん爲めに、草せられたるもの
に。而も凡ての人々の益となるべき、至要の眞理と教訓とを、多
く含蓄するものである。我等は凡ての基督信者、取わけ實地に傳
道的進撃的事業に従はるゝ人々に對し、此書を推薦して、其精讀
を煩はすものである。

此書はブース大將が八十二歳の當年に於て世に公にせらるゝも

のにて。彼が生涯の六十五年間は、實に神への奉事の爲めに過されたることを思へば、此書は偉大なる閱歴を有し、又世界各国を通じて、神と人との爲めに卓越せる事業を成したる人の、製作品であることが分る。

明治四十三年九月

東京にて

少將ヘンリーシー、ホツダー

譯者の序文

五十二文集は、ブース大將が救世軍の聖別會、又は兵士會に朗讀すべき爲め、著はされたる書翰文數百篇の中より、殊に五十二篇を擇み、之を纂譯して、一週一文宛、一年間に通讀し得べき様編輯したるものである。

譯文は達意を主とし、必らずしも一字一句に忠實なるものではない。こはいへ、ごこ迄も原意のある所を誤りなく傳へんと努めたる丈は、譯者の明言して憚らざる所である。

此書を發行するに至りたる理由は。

(一)これに由て、救世軍の下士官、兵士等を、訓練する上に適當なる一教科書を供給し。

(二)これに由て、目下我が日本の基督教界に缺乏したるを覺しき、信徒養成に關する一参考書を提供し。

(三)進んでは、ブース大將に由て代表せらるゝ、質實剛健、熱誠慈仁なる基督の宗教を、重ねて我日本國民に紹介せん爲めである。
願くは神、我等が區々の志を助け、此書を用ゐて、能く如上の目的の幾分かを、事實の上に成させ給はんことを、切に祈願する所である。

明治四十三年九月 救世軍日本々營にて 山室軍平謹識

五十二文集

目次

前篇 實驗之卷

(一) 新年を迎ふるの覺悟.....	一頁
(二) 神は善なり.....	九
(三) 悔改.....	一六
(四) 悔改に符ふ果.....	二五
(五) 信仰(一).....	三三
(六) 信仰(二).....	四〇
(七) 信仰(三).....	四七

二

(八) 信仰(四).....五三

(九) 神の賜.....五九

(一〇) 羔の血(上).....六八

(一一) 羔の血(下).....七四

(一二) 變らぬ救主.....七九

(一三) 義人.....八八

(一四) 靈の證.....九五

(一五) 光の中を歩む事.....一〇二

(一六) 祈禱論(上).....一一〇

(一七) 祈禱論(下).....一一九

(一八) 聖書論(上).....一二九

(一九) 聖書論(下).....一三七

(二〇) 基督を證する事(上).....一四五

(二一) 基督を證する事(下).....一五三

(二二) 世を離るゝ事(上).....一六一

(二三) 世を離るゝ事(下).....一六九

(二四) 勞働論.....一七五

(二五) 神を敬ぶの益.....一八四

(二六) 榮へる罪.....一九三

後篇 戦争之卷

(一) 救世軍とは何か(上).....二〇一

(二) 救世軍とは何か(下).....二〇九

(三) 戦争論.....二一八

四

(四) 埋れたる戦闘力……………二二六

(五) 汝の職分を盡せ(上)……………二三五

(六) 汝の職分を盡せ(下)……………二四二

(七) 婦人論(一)……………二五〇

(八) 婦人論(二)……………二五六

(九) 婦人論(三)……………二六一

(一〇) 婦人論(四)……………二六八

(一一) 兒童論(上)……………二七五

(一二) 兒童論(下)……………二八二

(一三) リバイバル論(一)……………二九一

(一四) リバイバル論(二)……………二九九

(一五) リバイバル論(三)……………三〇六

(一六) リバイバル論(四)……………三一三

(一七) 天來の火(上)……………三二一

(一八) 天來の火(下)……………三三〇

(一九) 友情……………三三七

(二〇) 戦線に立て……………三四五

(二一) 時は短かし……………三五二

(二二) 基督若し諸君の間に來らば如何……………三五九

(二三) 希望……………三六九

(二四) 死に處するの道……………三七七

(二五) クリスマス……………三八四

(二六) 年末の教訓……………三九三

以上……………はじめ

(四)	埋れたる戦闘力……………	二二六
(五)	汝の職分を盡せ(上)……………	二三五
(六)	汝の職分を盡せ(下)……………	二四二
(七)	婦人論(一)……………	二五〇
(八)	婦人論(二)……………	二五六
(九)	婦人論(三)……………	二六一
(一〇)	婦人論(四)……………	二六八
(一一)	兒童論(上)……………	二七五
(一二)	兒童論(下)……………	二八二
(一三)	リバイバル論(一)……………	二九一
(一四)	リバイバル論(二)……………	二九九
(一五)	リバイバル論(三)……………	三〇六

(一六)	リバイバル論(四)……………	三一三
(一七)	天來の火(上)……………	三二一
(一八)	天來の火(下)……………	三三〇
(一九)	友情……………	三三七
(二〇)	戦線に立て……………	三四五
(二一)	時は短かし……………	三五二
(二二)	基督若し諸君の間に來らば如何……………	三五九
(二三)	希望……………	三六九
(二四)	死に處するの道……………	三七七
(二五)	クリスマス……………	三八四
(二六)	年末の教訓……………	三九

以上

五十二文集

ブー ス 大將 著

前篇 實驗の卷

(一) 新年を迎ふるの覺悟

此世は移り變るものなり

此世は移り變るものである。それ故我等は今年一年の間に如何なる意外の變事に遭遇することがあるとも、決して周章狼狽してはならぬ。或は年の始めに健康を樂しんだ人が、年の暮には病床に呻吟することもあらう。或は年の始めに親しくつきあふた人が、年の暮には仲達をして居ることもあらう。或は年の始めに繁昌して居つた家業が、年の暮には疲弊して居る如きこともあらう。或は又年の始めに

不朽のものを求め

第一、平和の生涯を送る事

神と我との平和

は活氣に満ちたる人が、年の暮には早くも冷かなる墓に葬られて居る如きことがないとも限らない。かくの如く此世は移り變るものである。人間の榮枯盛衰は測り知られぬものである。されば我等は年の始めより心がけて永遠に存る眞正の財寶を求めることが肝要である。又生くるも死ぬるも變ることなき、天に屬ける物に目を着ける事が大切である。今其事を少しく左に説明したいと思ふ。

第一、諸君は此新年のみならず、今暫し許されて此世に生き存らへる間、常に其心に平和を保たん事を努めねばならぬ。之を細かく言へば。

(一) 諸君は神と己との間に平和を保たねばならぬ。過去に惡をなしたる記憶を皆拭ひ去られ、神の嘉し給ふ生涯を送る力を授けられ、神と我と和きて一となり、愛を以て之と語り、打連れて之と偕に歩むものとならねばならぬ。これは値高き眞珠にも比ぶべき寶物である。これは又巨萬の富を傾けても是非手に入るべき寶物である。それにも關はらずこれは此世の金銀を以て購はるべき性質のものでない。

然るに諸君は今自由に之を得べく、既に之を得て居るものも多いことである。而して「わが心の天をおほふべき、黒雲の影だにもなし」といふ歌を、神に對ふて心から歌ひ得るものも少くないことと思ふ。これは何ういふ仕合のことであるか。

(二) 諸君は又我と我胸中に平和を保つことが出来る。通常人は其胸中に肉慾と良心、義と不義との争鬭の斷間がないものである。善をなさん事を願ひながら惡の力に打負けて、心ならずも罪を犯す如き場合が至つて多い。さり乍ら諸君は其胸中に眞の平和を保つことが出来る。即ち歌に「耶穌基督の血汐により、聖靈の力により、邪まなる心は去られ、天國我衷に来る。」とある如き經驗を、此新年の始めから我有とすることが出来る。

(三) 諸君は又他人と我との間に平和を保つことが出来る。思ふに諸君が凡ての人から愛せらるゝといふことは、言ふべくして行はれ難きことである。諸君も亦然

我が胸中の平和

他人と我との平和

ういふことを求めぬであらう。さり乍ら諸君は、敵も、味方も、凡ての人を皆愛することが出来る。即ち歌に「我を贖ふ主の血汐の、紅の流に洗はれ、憤怒、嫉妬、憎悪、高慢は、今は痕跡もなし」とある。それを其儘信仰を以て歌ひ出づることが出来るのである。而して之れは必ず諸君箇々の實驗でなくてはならぬ。

第二、次に諸君は此一年間、凡て出會す程の人々に祝福を領たんことを覺悟せねばならぬ。諸君のうち、或者はこれ迄の月日を仇に過し、後悔する所多きものもあらう。さり乍ら今後は「凡ての時間を耶穌の爲めに用ゆるものとならねばならぬ。而して神の御助けにより、今年の中には非共幾人かの靈魂を、基督に導かん事を決心せねばならぬ。或は今年中に其家族の内或者を救に入らしむべき筈の人もあらう。或は神を知らぬ友人、罪に落ぶれたる墮落者を神につれ歸るべき筈の人もあらう。或は信仰の煮へ切らぬ戦友に活ける火を授け、或は小隊を振起する爲め盡力すべき責任を負へる者もあらう。其覺悟の臍を堅めよ。確乎たる決心は、

實行の半ばである。斯くて諸君が若し一年間無事に生き存へるならば、其年の始の決心は事實の上に現はるべく、或は年の終迄に死んで此世を去つて居ることも、其臨終の病床より、柩の中より、墓より、又は紀念會の席上より、多くの人々に大なる感化を及ぼし得べき事疑ひない。

第三、諸君は又今年主の御名を崇むるに足る行動をせねばならぬ。諸君は耶穌を愛し、又其事を世に發表して居る。宜しく宣言に伴ふ實行をせねばならぬ。オ、今一層耶穌を愛し度きものかな。余は自ら我が胸の中に此愛の増さん事を熱望するものである。歌に「救主よ我君を愛しむ、いつ迄も我心ををさめ給へ。主の恵の外には絶て我靈魂を充足はしむるものなし」とあるは、正しく余の感情をいひ現はしたる辭である。而して我等が若し眞に耶穌を愛するものならば、之れを實際の行の上に示さねばならぬ。即ち銘々祝福ある愛の生涯を送らねばならぬ。諸君は眞直に進んで神の御庫に近づき、金なく、値なくして、此の如き生涯を送るに

此の如き
生涯に入
るの法如
何

第一、服
従

必要なる凡ての恵を戴くことが出来る。余は諸君が富むか、貧しきか、賢きか、愚かなるか、若きか、老たるかを、一切氣にかけない。唯諸君が銘々己の爲めに備へられたる此の如き恵を手に入れて、我有となさん事を望むのである。然らば我等は如何にして右に述べたる如き平和にして幸福、且は有用なる生涯に入るべきかといふに。

第一、先づ大切なるは服従である。諸君は何でも神の前に我職分と認むる事を、申わけなごせず、直ちに履行せねばならぬ。諸君は余が「職分」といふ語を好んで唱へることを知つて居るであらう。余は之を以て自ら戒め、亦之を以て他人に要めて居る。余は神が他に類のない大文字にて、此一語を余の胸中に刻み付け給はんことを望むものである。諸君は如何なる代價を拂ひ、又は如何なる成行を身に引受るも、進んで其決心したる所を實行せねばならぬ。往て御旨のまに、諸君が今年の職分を行へ。それが身を献げて救世軍士官になる事であらうと、或は

第二、信
仰

罪人を誘ふて集會につれ來ることであらうと、野戦に證言することであらうと、病人を見舞ふ事であらうと、「ときこのころ」を賣ること、少年軍の爲めに盡すこと、「漁人」をすること、其他何でも、己が當然の職分と認むる程の事は、断じて之を行はねばならぬ。而して言へ「オ、主よ、我茲に在り、唯聖旨の儘になし給へ」と。

第二、次に諸君が若此新らしき年に於て、純潔と、平和と、力を有ちたいとならば、諸君は大膽に神を信じねばならぬ。向一年間我が職分を行ふ上に強からん事を望むならば、又それ丈信仰に於て強からん事を心がけねばならぬ。神の軍人の最も大なる弱點は、其神を信任するのが足りないことである。歌に「われに缺けたるものは是れ也、耶穌に對する今少しの信仰、これを我に缺けたるものなれ」とあり。救世軍人よ、もつと大に耶穌に對する信仰を有て。信仰こそは我等に取りて大なる缺乏である。昔盲人の眼を開きたるものは信仰である、中風患者を起

たしめたるものは信仰である、老たる男の一子より鬼を逐ひ出したるものは信仰である、ヤイロの娘を蘇らせたるものは信仰である。而して信仰は尙其他に幾百千の不思議を行はしめたものである。「信する者には能はざるなし。」オ、主よ「我等に信を増したまへ。」信仰は諸君をして此新らしき年を勝利の中に過さしむべきものである。我が軍人よ諸君は大膽に神と其力とを信仰するであらうか。

(二) 神は善なり

余は近頃神の善なることに就て考へて居つたのである。詩篇の第七十二篇に「神はイスラエルに對ひ、心の清き者に對ひて、まことに恵あり」といふ句がある。神は眞に恵深くして、且善なる御方である。英語にて「God」即ち「神」といふ字は「Good」即ち善といふ字のつまつたものであるのは、面白い事と思ふ。

第一、神は自ら善の性質を備へ給ふのみならず、又あらゆる善の源で在し給ふ。「凡ての善き賜と全き賜とは皆上より來る」とは此事である。神は又凡ての祝福の本で在したまふ。其御名を讃めよ。凡ての善の流れは神てふ源から注ぎ出て、いつ迄も盡さず、又涸るゝことなきものである。

第二、我等が住居する此世界は、其始め善なるものであつた。山も、岡も、海も、河も、木も、草も、禽も、獸も、將又我等の先祖アダムとエバとも、一切のもの

第一、神は善の源也

第二、善なる地なる天

は皆悉く善であつた。聖書に神が天地を創造し給ふ時、其都度其成蹟を考へては「之を善と観、」最後に至りて又之れを「甚だ善」と認め給ふたのである。之を以て見ても、元來此世は申分なく出来た榮ある世界である。其分で繼續さへして居つたならば、之は如何にも結構なる世の中であつたに相違ない。併し乍ら、ア、不幸なことには悪魔が人の心を暗まし、人は其結果として神に對する信任を失ひ、罪の世渡をする様になつたのである。而して之は今日迄繼續して居る悲しき事實である。神は世界を善に作り給ひたれど、悪魔が之を悪くしたのである。

第三、それにも關らず、神は再び此世を善に引戻すべき道を立てたまふた。即ち獨子耶穌基督を降して罪に亡ぶる世の人を救はせ、悪魔の玉をこぼち、天國を此世に打建てんとして在し給ふ。之に由て人々の律法に反きたる愆は赦され、其様に染みたる心は洗はれ、再び幸福善良の民となることが出来来る。今凡ての救世軍人は此神の大なる賜に由り、救はれて善人となつて居るべきもの

である。諸君は果して善人となつて居るか、否や。諸君は善良なる心を有つか、否や。善良なる生涯を送り、善良なる事業をなして居るか、否や。又善人を造る爲めに働いて居るか、否や。諸君は果して其夫、妻、父、母、子、女、兄弟、姉妹、友人朋輩に對し、彼等を善人とならしめん爲めに盡力して居るか。彼等に眞の善とは何かを示し、身を以て之が模範となつて居るか。善の源なる神の力に由りて彼等を動かさん事を努めて居るか。抑々又神が諸君に望み給ふ如く其家庭を善良なる家庭として營んで居るか。

諸君は又果して一般の人々を善に導かんことを努めて居るか。これは諸君が野戰にて、公けの會合にて、又は彼の大切なる子女を多く扱ふ少年軍の集會にて、抱く所の目的であるか。諸君は何人かの足を善に向けて居るか。慥かに天國の彼岸に到着せしむる様善良なる道を歩ませて居るか。諸君は又一度恩恵を受け乍ら罪の穢れに後戻せんとする人々を引止めん爲めに力を盡して居るか。神が若し眞に

諸君を改造して善人となし給ふたものであれば、諸君は他人を善人となさん爲めに、夜晝力を盡して居るべき筈ではないか。

然るに諸君が若し人に善をなすの習慣、性質、精神を有ぬならば、余は諸君が眞に神に屬ける聖徒たる事を信じ兼ねるのである。使徒パウロは「凡て基督の靈なき者は基督に屬かざるものなり」といふて居る。誰も知る如く基督の靈は善の靈である。彼は其善靈に導かれて此世に降り、罪人を地獄より救ふのみならず、又之を善人とならしめん爲に畢生の努力をなし給ふたものである。

第四、されば諸君が若し其性質、傾向に於て、言語、舉動に於て、又凡て其生活及び思想に於て善良ならざる所があらば、一刻も猶豫してはならぬ。直ちに神に行け。唯神のみ諸君を眞の善人となし得る御方である。

然らば如何に神に行くべきか。これは兼々諸君が知つて居る通りである。即ち「靈と眞と」を以て神に近き、跪いて其心の誠を訴へ奉つるの外はない。それに就て大

切なる簡條は左の如し。

(一) 其心靈上、生活上、凡て不善と心付たることを悉く改め、永久之を見限る事。

(二) 爾來我身上、又家庭の事、小隊の事、其他歡樂遊戯の事迄、一切神の御旨のまゝにのみ従ふ約束をする事。

(三) 同時に神は我を善人とならしむる力あるを信じ、又神は耶穌の贖により、其場にて即刻、之を爲し給ふと信する旨を告白する事。

(四) かくて後、眞直に進んで善を行ふ事。此場合其感情は兎もあれ、身の置き所は何處でもあれ、又如何なる運命は其身に落ちて來やうとも、そんなことには頓着なく、進んで善人の行をなし、懼れず、疑はず、之を繼續せねばならぬ。

第五、扱、軍人及軍友諸君、自ら善人となり、又善人の仲間に入りたる事を、其胸中に自覺するは如何にも幸福なることである。世には金満家となりて多くの財

善を爲す
最も樂

産を自由にするは此上なき樂みだといふ人がある。余は其經驗がないから固より之を保證することは出来ない。又は他人に尊敬せらるべき地位、名譽を有するは樂しいことだといふ人がある。余も幾らか其心當りがないではない。又は高等なる教育を受け有ゆる學術に達するは樂きことだといふ人がある。最も學問才能は之を自らの爲に用ゆると、他人の爲めに用ゆるとに由て、其効力に大なる相違がある。而して賢き人たるは樂しく、愚者たるは悲しむべきことである。取わけ自分の愚者たるを感ずるは、つらいことに相違ない。さり乍ら余の見る所を以てすれば、前にいふたる凡てのものを合せたよりも愈つて最も樂しきは、我等が善人たる事である。即ち我等が神の力によりて善人となり、斷ず善事を行ひ、又善事を成就しつゝ、世渡をすることである。而してかゝる人々は特別に神より愛せらるべき理由がある。何となれば神は常に善人を愛し、之に目をかけて用ゐ、最後には之を迎へて天國の榮に入らしめ給ふ

故である。然れば我等は自から勵みて善人たらん事を努めねばならぬ。之は我等が善良なる神に事へ奉つるの道である。

(三) 悔 改

悔改めず
べし亡さる

悔改！これは最も大切なる題目である。神は人が其恩恵を受くる條件として彼等が悔改むる事を要め給ふ。人は悔改なくしては救を受ける事が出来ない。即ち基督が「爾曹悔改めずば皆同じく亡ぼさるべし」と仰せられたのは、この事である。凡ての人は自ら省みて其己に反る時、先づ其罪を悔改むる必要を感じるものである。常に悔改の必要を感じるのみならず、それが唯一つの自分に爲し得べき所であることを、發見するのが其習である。

放蕩息子
の嘔

聖書の中にて、彼放蕩息子悔改の物語は、人情の機微に觸れ、多くの人を感動せしむる條はない。我等は彼譬喩談を讀む度毎、放蕩息子が彼場合に其罪をふり棄て父の家に歸りたるは、如何にも當然の處置であつた事を感じざるを得ない。然るに同じ悔改といふ中にも、種々流儀の變つたのがある故、今余は少しくそれ

第一、根
底なき悔

等の事を説き明し度と思ふ。

第一、こゝに夜明け前の雲か又は朝の露と同じく、直ちに消て痕のなくなる悔改がある。昔のイスラエル人は度々此の如き悔改をして居た。彼等は其罪を認め、涙を流して之を悔み、以來二度とふたゝび、同様の罪を犯すまじと約束するかと思へば、直ぐに復そばかり同じ悪を行ひ、却つて前よりも悞然な有様に陥つたものである。

併し乍らこれは唯昔のイスラエル人ばかりでなく、今日我等の知人朋輩の中にも間々此種の人があり、我等の會館に出入する者の間にも、亦往々此類の人々を見受けることである。然らば我等銘々に於ては如何。果して同じ不義の行を再三再四くり返して居る如きことはないか。深く自ら省みねばならぬ。

第二、こゝに又絶望的の悔改といふがある。即ち耶穌を賣したるユダの悔改の如きは是れである。彼が其犯せる大罪に心付たる時惡魔は彼に來りてこれを欺き、最

第二、絶
望的の悔

第三、眞
正の悔改

罪人と悔
改めよ

早くなる上は到底浮む瀬はなきものと説き聞かせた。そこで彼は往て救主の足下に身に投出し、其救を求むる代りに、自から縊れて死んだのである。これは絶望的の悔改といふものである。さり乍ら幸ひ我等の中には、一人として彼の二の舞をなすべき必要のある人物はないこと、思ふ。

第三、こゝに又眞の悔改といふがあり、即ち十字架の賊がなしたる悔改は是れである。彼の賊は曾て聖書研究會に出席したる事なく、説教を聞きたる事なく、又何等の儀式禮典に與りたる事もなかつた。さり乍ら彼の悔改は眞實であつた。それ故に主耶穌は彼の願を聴きいれ給ひ、彼は天國に入ることを許されたのである。

今此文を読む人々のうちに未だ眞に其罪を悔改めず、罪の悪たる事を充分に辨へぬ如き人はないか。即ち未だ眞に其罪を悲しまず、之をより棄てることをせず、随つて未だ眞に救を受けて居ない様な人はないか。若し然ういふ人があらば、それ

墮落者よ
悔改めよ

神との約
束を守り
たりや

は如何にも悲しむべきことである。

或は又此文を読む人の中に、信仰より墮落した儘悔改めずに居る者はないか。若し然ういふ人があらばこれは又一段と悲しむべき身の上である。此の如き人々に丁度當る聖書の語は、黙示録に「我曾て此婦に悔改むべき機を予へたれど其奸淫を悔改むることをせざりき。」(黙二〇三)といふ一句である。余は此句を読む毎に深く心に感ずる所がある。人は其罪を悔改むべき機會を予へられ乍ら、それを等閑にすれば、終に救はるべき望がないものである。何と恐ろしいことではないか。

さり乍らこゝに眞の悔改といふものがある。而して之を行ふ者の上に神は大なる祝福を授け給ふ。余は今其れに就て諸君に問ひたいことがある。

諸君は始めて神の前に出で、恩寵の座に跪つきたる時、何と神に約束したかを記憶して居るであらうか。諸君は其時、諸君が過去の不眞面目にして浮きたる生涯

を悔むこと、また以來重ねて此の如き罪深き生涯を繰返すまじきことを誓ふた筈である。諸君は果して其約束を眞實に守つたであらうか。諸君は又過去の不深切なる行を悲み、其後は再び斯る不深切をなすまじきことを約束したる筈である。又過去の不潔不淨なる生涯を痛悔し、以來は一切かゝる行動をなさず、却て自分を此の如きことに誘ふ友人或は場所に遠かるべきことを約束したる筈である。

諸君は果して此等の約束を嚴重に守つたであらうか。諸君は又曾て聖書を讀み、祈禱をするなどの務を怠り、神の恵を受け損なふたる事を心より恥ぢ且嘆き、今より誓ふて新らしき生涯を送り、耶穌基督の爲め其僕等と協力して働くべきことを誓ふたる筈である。諸君は果して其嚴かなる誓を守つたであらうか。凡て此等の事は皆諸君の悔改の一部分である。それ故これを守ることをなくしては、其悔改も又神に受納れらる可き道理がないのである。

第四、人の爲めの悔改

母の爲めに悔改少女

諸君が今若し右等の約束を守らず、又其精神に由りて生き存へて居なかつたこと心付たならば、諸君は今其悔改の仕直しをせねばならぬ。さもなくば神と雖も終に諸君を見離し給ふの外はない。

第四、然るにこゝに今一種の悔改がある。余はそれに就て今一言を附け加へ度と思ふ。而してそれは他人の爲めにする悔改である。若し人が罪を犯して之を悔あらば、耶穌基督をふみつけにして悔めないならば、諸君は彼等に代りて之を悔改めてやるが宜い。

耶穌基督は嘗て此の如き悔改をなし給ふたことがある。即ち彼はエルサレムの爲めに涙を流し、其罪の爲めに悔み悲しみ給ふたことである。

余が折々引例に用ゆる一少女の話がある。此少女は救世軍に屬し、其兵士の制服をさへ着用して居つたが、或時大層泣き乍ら悔改の座に進み出た。そこで一人の軍曹が傍に寄つて彼少女に向ひ「愛する少女よ貴女はどうして此處へ出て來たの

ですか、何か虚言でも言ふたのですか」と尋ねると。少女は答へて「いへへそんなことはありませぬ」といふ。「其では腹でも立て人に失禮なことをしたのですか」と問ふと。矢張「いへえ」といふ。「それでは何しに悔改の座に出て来たのですか」と尋ねると、少女は涙の下より答へて。「私は阿母さんの爲めに、こゝへ出たのです、阿母さんは幾許勸めてもお出になりませぬから、私は阿母さんの代りに悔改の座に出たのです」といふ。あまりのいぢらしさに軍曹は色々少女を慰め、一緒に祈禱した。少女は神が其祈禱を聴て必ず母を救ひ給ふとの保證を得、急ぎ家に歸つて。「阿母さん、阿母さん、私はあなたの爲めに悔改の座に出ました、あなたも自分で悔改をなさい」と、語り出ると、強情なる母も終に少女の熱心に感動し、其夜悔改めて基督の救を受けたといふことである。

諸君は曾て他人の爲めに此の如き悔改をしたことがあるか。諸君は罪人や、墮落者をこがめる。併し乍ら曾て彼等の爲めに泣き、又其爲めに悔みたることがある

か。諸君は其妻、其夫、其子、其女、其他何人か同じ家庭に住むものにて、基督の血をふみつけにし、之を悔り瀆す如き者を有ては居らぬか。若し其家庭にかゝる人がなくば、一步ふみ出して其門の外を眺めよ、そこには神もなく望みもなき人々が、一ばい充ち満ちて居るではないか。諸君は果して彼等の爲に悲み悔て居るであらうか。

余は毎年十一月某日、獨逸の首府柏林に行くことにして居る。これは其頃同國に「悔改の日」といふがあり、國民擧つて大に自らを省み、其罪を悔いて改むる規定になつて居る故、其日を目懸けて出かけて行くのである。依て思ふに、これは如何にも結構なる制度である。我が救世軍に於ても、或は一年に一日を定めて之を「悔改の日」となし、此日殊に自らを省みて其罪を悔改め、其家族の罪を悔改め、更に進んで徧く全世界の罪を神の前に悲み悔むことにしたならば、有益であるかと思ふ。

之を各小隊に配りては如何

余が伯林に行く時には、毎年大きな會場にて其日の中に二回の大會合をなすに、毎會集まる者五六千人あり、悔改の座に進み出づるもの、數も少なくない。余は諸君が亦いつか一度、余と一緒に、此「悔改の日」の集會に出席することが出来たならば、どんなに面白いことかと想像する。

併し乍らそれは到底出来ない話である。けれ共諸君が其小隊にて或日曜日を決めて「悔改の日」となし、特別の催しをしたら何うかと思ふのである。而して諸君が其地方に於ける救の事業の遅々として一向抄取らぬこと、又は戦闘力の不足なること、或は其周圍に在る罪人の哀れにして又痛はしき有様に就き、胸をうつて、神の前に悔改めるならば、それは非常に有益の事であると思ふ。

二四

(四) 悔改に符ふ果

大切な教理

余は曩きに悔改といふことに就き諸君に忠告する所があつた。思ふに諸君は此の如く大切な教理は他に多くないことを感じて居るであらう。人は唯悔改の道に由てのみ、其造主なる神と和らぐことを得べきものである。人は又其周圍の人々に對してなしたる悪事を悲しみ悔ゆべき筈のものである。

昔バプタスマのヨハ子は、耶穌より少し以前に世に現はれ、ユダヤの國民にむかひ、其犯せる罪を責め、惡を戒め、若し此の如き行を續けて居るならば、やがて恐ろしき天罰が其頭上に落ち来るべきことを警告すること。之を聞て其心刺さるゝ如く、進んで其罪を悔改たる者も少くない。是に於てヨハ子は更に彼等に告げていふ様、「我は汝等が唇にて悔改めるのを見たる丈では満足することが出来ない。若し汝等の悔改が眞實であれば、宜しく之を事實の上に證明せよ。宜しく悔改に

悔改に符ふ果を結ぶ

二五

諸君に於ては如何

如何なる果を結ぶべきか

第一、惡事を行はぬ

符ふ果を結べよ」と申し開けたのである。

其當時曰ハ子の教を聞きたる人々は、大抵皆自ら認めて「我は眞に悔改めたる人なり」と考へて居つたものと見える。それと同じく只今此文を讀む諸君も亦、自ら眞に悔改めたる人なりと思ひ、又我は其惡き行に心付く度毎、深く之を悲まなかつたことはないなど、考へて居る者が少なくないであらう。さり乍らこゝに尙大切なる一問題が残つて居るといふのは他でもない。諸君は果して其悔改に符ふ果を結んで居るか否やといふことが、それである。

我等が若し種を鳥に播くならば、相當の時節に其收穫をすることを待つであらう。其如く眞に悔改めたる人には又悔改に符ふ果がなくてはならぬ。それ故余は今眞に悔改めたる人々の身の上に必ずあるべき事數箇條を述べて、諸君が果してそれ丈の果を結んで居るか否やを、反省するの助と致したいと思ふ。

第一、惡心付たことを行はぬ事。眞に其罪を悔改めたる人は重ねて其惡と認

第二、前罪を償ふ

第三、人の罪を赦す事

むることを行はぬ筈である。それが虚言詐欺をいふことであるか、放埒不身持の行であるか、その他自分がこれ迄如何程すきこのんだる行爲と雖も、凡て惡いと氣の付たことは之を止めてしまはねばならぬ。惡いと氣の付たことを止めずと置いて、我は悔改めたりといふことも、それは人をも、天の使をも、亦我自らをも、満足せしめ得るものでない。諸君は此意味を諒解したであらうか。

第二、精々前罪を償ふ事。次に大切なるは何でもこれ迄他人に迷惑をかけたることとは、努めて之を辨償すべきことである。勿論世には後から取返しのかかぬ罪が多々ある。一旦過ぎ去りたる憂ひ嘆は後日に於て之を取消すことの出来ない場合が至つて多い。さり乍ら中には亦幾らか後日に至り辨償の道のあるものもある故、眞に其罪を悔改めたる者は、其方に及ぶ限り、以前になしたる惡事を辨償することを努めねばならぬ。諸君は此意味を諒解したであらうか。

第三、人の罪を赦す事。次に眞に己が罪を悔改めたる人は亦他人が己に對して犯

したる罪を赦すべき筈である。既に我が犯せる罪を神より赦されたならば、其如く亦他人の罪を赦すのは當然のことである。若し然うでなくば、其人の悔改は神の前にも人の前にも通用するものでない。即ち基督が「若し人の罪を赦さずば、爾曹の父も爾曹の罪を赦し給はざる可し」と仰せられたのは此事である。諸君は此意味を諒解したのであらうか。

第四、善悪に遠かる事

第四、善悪に遠かる事。眞に悔改めたる人は又、二度と再び同様の罪をつくらぬ様、警戒すべきものである。古き諺に「火傷した子は火に恐る」といふことがあり、罪を悔改めたる人は善悪を恐れ、つとめて之に遠かる様心がく可きものである。即ち酒をのむこと、いやらしい小説本を讀むこと、浮いた流行を追ふこと、怨み、嫉み、其他何でも以前自分を苦めたる罪惡には、寄りつかぬ工夫をせねばならぬ。唯其心より惡を棄てたといふ丈にて満足してはならぬ。其身邊より一切の惡を遠げよ。之は最も肝要なることである。諸君は此意味を諒解したのであらうか。

か。

第五、惡友と絶つ事

第五、惡友に暇を告ぐる事。悔改めたる人は又以前に己を罪に墮したる凡ての惡き友達、又は惡き境遇を離れねばならぬ。即ちこれ迄一緒に惡を行ひたる仲間の者に對ひ、最初に對面する機會を捉へて、此度自分が罪を悔改めたることを告げ、彼等も亦同じ決心をなさん事を勸告するが可い。而して今後は最早これ迄の如く一緒に滅亡の道を辿ること能はざる由を、包まず彼等に語らねばならぬ。諸君は此意味を諒解したのであらうか。

第六、善き友と交はる事

第六、善き友と交はる事。其次に大切なるは、爾來交はりて益ある友を擇み、共に義しき途に進む様、互に奨勵鼓舞することである。余は毎度新しき悔改者に對ひ、「この後貴君はつきあふて利益になる人と交際せねばならぬ」と忠告して居る。諸君は自分が再び信仰より墮落することなき様支へて呉れる人を見付て、之と交はらねばならぬ。諸君は此意味を諒解したのであらうか。

第七、悔
改の精神
を持続す
る事

第八、他
人を悔改
に導く事

第九、懺
悔する事

第七、引續き悔改の精神を持続くる事。引續き最初の悔改の精神を持ち續けることは、是れ眞に悔改めたる一つの證據である。流したる涙は直ちに乾き、碎けたる心は直ぐに平生に復つてしまふといふは、其感動の餘りに深くない爲めである。諸君は此意味を諒解したであらうか。

第八、他人を悔改に導く事。又己が周圍の人々を悔改に導くことは、其人の悔改の眞實なる證據である。其父、母、夫、妻、子女、又は友人の救を心にかけるといふは、眞に罪を憎み救を重んずるもの、習である。他人の心に悔改の念慮を起さん爲に盡力する程、己が靈魂に悔改の精神を維持する良法はない。諸君は此意味を諒解したであらうか。

第九、大膽に懺悔する事。最後に今一つ眞に悔改めた人は、其犯せる罪を人々の前に懺悔する筈である。これは又た悔改に符ふ果の一つである。コロンウオール地方(英國)の改心者は、これ迄自分の出入したる居酒屋と、又酒飲仲間とにむかひ、大聲に暇請ひすることを、悔改に符ふ果の一つであるを考へて居る。實際自分が神より罪の赦を受け乍ら、之を言現はすことを耻づる様では、其悔改も覺束ないものである。諸君は此意味を諒解したであらうか。

我軍人よ、これ等は諸君の悔改の眞實なることを否とを定むる條件である。之を以て己が悔改を驗し見よ。而して若し聊かでも不確實なる筋があると思ふならば、何はさて措き今一度跪いて神の前に新しき悔改をなし、慥かに救はれたりとの保證を得る迄満足してはならぬ。諸君は充分此等の意味を諒解したであらうか。

(五) 信仰 (二)

信仰とは

余は今、度々人々の語り合ふ題目「信仰」といふことに就て、少しく諸君に語りたいと思ふ。而して便宜上、昔耶穌が其弟子に告げ給ふたる一句「神を信せよ」(可十一〇三三)といふ語にもとづいて話をしたいと考へる。余は先づ「信仰とは何か」といふことから、其説明を試みるであらう。

神を信するは猶人

元來宗教上の信仰は、人々相互の間の信仰と別段の相違はないものである。神に對する信仰と人に對する信仰との相違は、其性質の上ではなくて其對象とする者の上にある。即ち宗教上信仰の對象とする者は至大なる神にて、其信仰の結果受くる所の祝福は亦他に比類なき程大なるものである。これは其人間に對する信仰と著るしく相違する點である。

さり乍ら此等の點を別として考へるならば、我等が神に對する信仰と、人に對する

人を信する者には其言を信す

信仰との間には、甚だ相似たる所がある。今諸君は其夫や、妻、又は他人を信するといふのは、如何なる意味かといふことを知つて居る。これは彼等を信用することである。而して神を信するといふのも亦道理は全く之と同じことである。諸君が或人を信するといふ時には、其人の書いたもの、又は其言ふた語を信用し、之を眞に受けて事をなし。若し何人が其間に水を差さうとする者があれば、之に答へて「私は彼人の言を信用する、彼は其約束したる所を必ず成遂る人である」と、かやうに言ふであらう。此の如く信用に由て事を爲るのは、即ち其人に對する信仰といふものである。

さり乍ら人に對する信仰とは、只其人の言を信するのみならず、亦其人を信することである。只其口に言ひ、筆に書く所を信用するのみならず、亦其當人を信任することである。即ち「私は彼の心事を知り、其人柄を知つて居る、彼は當になる人物である、若其力にさへ叶はば必ず私の爲めに盡してくれるに相違ない、

人を信する者には其人物を信す

其如く神の語を信ぜよ

其如く神自らを信ぜよ

私は彼の人を信用する」と、かういふ話をするところがある。これは其人を信ずるといふものである。扱て我等が神を信ずるといふのも亦、全く右の道理に外ならぬことである。

我等は自分で辨へて居る限り、神の語を信用せねばならぬ。それが何んなに骨の折れることであつても、又は如何に他人に拒まれ、所謂學者に疑を挾さるゝことであつても、苟もそれが神の語である以上は、之を眞實として受け容れ、其約束を眞に受けて行くのが、即ち信仰といふものである。

さり乍ら神を信ずるとは唯其語を信ずるのみならず、進んで神自らを信ずることである。即ち活ける大能の神の在すことを信仰し、假令其身の上、又は其周圍に如何なる事が起らうとも、そんなことには頓着なく、神が常に諸君を愛して居給ふこと、又凡ての事は悉く働きて諸君の益となる様仕向けて居給ふことを信用する。これが即ち神に對する信仰である。神の語を信仰するは至つて大切なことで

信仰は單純なるものなり

第一、信仰と感情とを混同するを勿れ

ある、併し乍ら神自らを信仰するは、更にそれよりも大事なことである。そこで、イエスが「神を信せよ」と仰せられたる語の意味は、何うかといふことが大概諸君に分つたであらうと思ふ。

信仰とは此の如く單純なるものである。さり乍ら世には此單純なる信仰の意味を誤り、飛んだ思ひ違ひをして居る者も少くない。それ故余は今世間に有り勝の思ひ違ひ一二を左に辯じ度と思ふ。

第一、信仰と感情とを取違へてはならぬ事。我等は信仰と感情とを取ちがへ、何か一種特別の感情氣持がせねば、信仰にあらざる如く考へ、又は感情氣持を信仰に代用する如きことがあつてはならぬ。多くの人は其信仰の事を考へる時、この處を思ひ違へて失敗するのである。即ち彼等は信仰に由て何等かの祝福を求めるとき、其胸中に一種の感情の起らんことを願ひ、それが起らねば失望落膽して「嗚呼我は不信仰にして用に立たぬ」と自暴自棄する如きことが往々ある。

併し乍ら信仰と感情とは全く別物である。固より信仰は、屢々感情を伴ひ、又信仰の後に感情が直ちに随ひ来る如き事實はある。それにも關らず此二つのものは決して同一物ではないことを知らねばならぬ。

順序から言へば、信仰は感情に先だつて行く可きものである。然るを世には兎角感情を先に立て、信仰の事を後にする人々が多くあるのを見て、余は今から六十年前、未だ一青年であつた頃、之を馬の頭に馬車をくくり附ける人に喩へたことがあつた。信仰が先に行き、然る後に感情が之に随ふのは、是れ當然の方則に適合するものである。

第二、信仰と目に見ること、を混雜してはならぬ事。我等が往々「赤裸々の信仰」などいふ語を用ゆるのはこの道理である。信仰は奇蹟に頼らず、休徴を當にせず、事大小なく唯神に信任して疑はぬことをいふ。此の如きものが最も有力にして、且永續すべき眞の信仰といふものである。

余が少年の頃或信仰家が余に對ひ、「少年よ暗黒の中に神を信ぜよ、さすれば光明の中に神を信することは至つて容易であらう」と、此様に言の聞いた事がある。今此事は出來ると信じ、又彼の事は出來たと信するといふは、此事が出來るのを見たとか、又は彼の事が出來たのを知つて居ると言ふのとは話が違ふ。それにも關らず、我等は度々、事の成行を見届けたる上、始めて之を信仰し様とする弊がある。これは人々の陥り易き過失である。

エリヤはカルメル山上に信仰を以て雨を祈つた。併し乍ら彼は掌ほどの雲を見た上に始めて始めて雨の降るべきことを信じたのではない。天は銀の如く照りつけて居り、傍に侍べる青年は、幾度窓の上に行つて眺めても、更に雲らしきものを認めぬ時、それにも關らず、エリヤは屹度雨が降ると信じ、又神が雨を送り給ふと信じて居つた。それ故にエホバは彼の祈禱を聴き、これに應へ給ふたのである。エリヤは眞に神を信する人物であつた。

見ずして
信するも
の福也

一萬の困
難を一萬
の解決

我等は兎角、掌ほどの雲を見て夕立の到るを信じ、會衆が多く集まり、悔改の座が賑ふなど、幾らか祈禱の應驗が見え始めて後、始めて神の恵を信じ易い様覺えるものである。さり乍ら耶穌基督が教へ給ふた信仰は、神の語を眞に受け、其約束を確實なりとして受け入れることである。而して假令其信する所を事實に認め得ざる場合と雖も「見ずして信する」者でなくてはならぬ。我等は神の善良、忠信、慈愛を、手に取る如く確實に信仰して毫も之を疑ふことがあつてはならぬ。耶穌基督は唯今諸君に對ひ「神を其語の儘に信せよ。彼は欺くこと能はざる御方である。彼は必ず其約束したる所を成就し給ふであらう。唯彼に信任せよ。神は一萬の困難に對しては、亦一萬の方法を以て之を助け得る御方である。それ故にこゝ迄も彼を信用し、やがて其信用に相當する恩恵を受けよ」と、仰せられて居るのである。

されば我が軍人よ、諸君は今耶穌の足下に出で、謙遜してこれ迄の不信仰を赦さ

信仰を以
て祈るべ

俟望みつ
つ祈り續

れんことを祈らねばならぬ。而して若し又諸君に何か特別に願ひ求むる事もあらば、信仰を以て之を祈らねばならぬ。其特別に願ふ所のものが果して何であるか、罪の赦か、靈魂を愛するの熱情か、又は悲痛の中に慰めらるゝことか、試練より救はるゝことであるか、又はそれが聖書に明文のある事か、否かに關らず。苟も諸君が神に祈る程の事は、必ず神が之を聴くことを望み給ふと信じて祈らねばならぬ。

されば今跪いて神の恩恵を祈れ。諸君が既に有する所の恩恵を後楯と恃み、進んで今求めつゝある恩恵を、其場にて直ちに授けられん事を信じて祈れ。

それとも若し直ちに祈禱の應驗がなれば、信仰を以て俟望め、而してこれ必竟神が諸君の爲めに最上の善を圖つて居給ふ所以であると信じ、其求むる所の恩恵を得る迄は、信仰を以て祈り續けねばならぬ。

(六) 信 仰 (二)

余は前に信仰は如何に單純なものかといふことを説明した。余は諸君が銘々、耶穌基督の我等に對して要め給ふ信仰は、我等が御互の間に取かはす信任又は信用と同様のものにて、即ち神と其語とを信用するといふより、以上でも、亦以下でもなき、極めて單純のものである道理を、十分諒解せんことを望むのである。そこで余は今進んで、然らば我等が信仰の對象とする者は何かといふことに就て話し度と思ふ。

一言にいへば我等が信仰の對象とする者は神である。眞正の信仰は他人を當にするでなく、己が感情や覺悟の上に安んずるでもなくて、唯活る神御自身に依頼することである。所謂「神を信せよ」(可十二〇三)とは、最もよく此意味を言現はしたる語であると思ふ。

信すべき者は惟神のみ

第一、神の代りに、神の力に信す可らず

第一、神を信する代りに人の力を信してはならぬ事。山の如き惡と禍とを除き、罪と愆とに死たる人を蘇らせ、之をして聖潔の道を歩ましむるものは、唯神を信するの信仰許りである。人の力は之を如何ともする事が出来ない。肉に頼るものは、いつも唯失敗をくり返す外はない。聖書に「人を頼む者は詛はるべし」とあるは此事である。もとより諸君が己が救を得る爲めに力を盡し、又は周圍の人々を救に導かん爲に働くことは、何より大切である。神と雖此等の點に於て、諸君の爲めに代理をなし給ふものでない。

とはいへ、諸君が其言ひ又は行ひ得る事を、悉く果したる所にて、尙其上に必要なるは、神の語を單純に信じ、疑はずして其心に神を頼むことである。然り諸君は其力に及ぶ限りのことを果したる上にて、尙信仰を神に置き、其慈愛なる實際上の御協力に依り頼まねばならぬ。神は凡て善良完全なる行動の作者である。それ故我等は神を信じねばならぬ。

人の力に神の助

第二、神の代りに手段方法を信ずる勿れ

信仰なき一婦人

第二、神を信ずる代りに手段方法を信じてはならぬ事。諸君は如何なる手段方法を探つて之を其身に應用するとも、若し神の力を有しないならば一向何の役に立つものでない。のみならず油断すれば、却つて其等の手段方法に妨げられ、往々神に頼るよりも自らに頼る如き恐れがある。多くの人々は此點に於て大なる誤謬に陥つて居る。即ち彼等は只管天父の御保護に信頼して居る積りにて、其實は兼々自分を作りたる設備、計畫等にも依頼んで居る様なことが度々ある。或時熱心に神を信じ神の外は何一つ當にしない積りの婦人があつたが、航海中難船にあひ、船長から「最早此船は人間業で助かる見込はありませぬ故、何卒只管神に依り頼つて下さい」と言はれ。喫驚仰天して、「これは困つた、さては愈々そんな心細いことになつたのか」と、あはてふためいたといふ話がある。即ち此婦人は平生神の外何者にも頼らぬといふ眞正の信仰があるものと心得乍ら、まさかの時になつて、始めて一向然ではなかつたことを發見したるものである。

救世軍人は如何

これと同様の誤は、年中多くの人々のくり返して居る所である。殊に救を得るに必要の手段を重ずるの餘り、却つて救を與ふる神を信ずることが足らず、飛んだ間違をして居る如き例は甚だ多い。或は神に頼る代りに聖書にたより、祈禱にたより、或は儀式禮典にたよる。彼等は別段神を信仰するではなくて、漠然只此等の手段方法を當にし。更生といふ如き大事さへも、神の力の方面を忘却して、何だか唯自分の盡力に依り、成就せられる事の如きつもりになつて居るのである。我等救世軍人の間には、果して此の如き危険に陥る恐はないか。例へば會衆を得、金を得、靈魂を得、其他事業の成功を得る上に就き、専ら其士官や、又は建物を當にし、或は軍歌や、祈禱や、人の骨折をのみ頼りとして、却つて聖靈の働を信じ、神の力に依頼むことが缺けて居る如き恐はないか。又は人生の心づかひに倦みつかれ、惡魔の誘惑になやむ時、或は他人の救の爲めに働けども一向其甲斐が見えぬ如き場合に、佑助と慰藉とを神に求むる事はせず、

神に行か
ずして人
ら行く可

救はエホ
バにおま

第三、神
に依頼み
て其務を
行へ

四四

却つて先づ人に行く如きことはないか。若し然ういふことがあらば、之は事實上、神を信するよりも愈りて他人の助力を信するものではないか。

余は今此文を讀む軍人等が、此の如き人々であるとは言はない。が只恐れるのは、多くの兵士達の中に、其救に關する信仰を神よりも寧ろ人間の方法に置くものがありはすまいかといふ事である。さり乍ら我等救世軍人は平常「救はエホバにあり」と大聲に天下に宣言して居る人民である。我等は神が人を救ひ、神が救を保ち、又神が人々の信仰の量に應じ、之に成功を與へ給ふことを宣言して居る者共である。されば我等はこれ迄に會てなき程、奮發して神を仰ぎ、只管神に依頼まねばならぬ。

第三、神に依頼みて其務を行ふ事。もとより諸君は自らに對し、又周圍の人々に對し、肉と靈との幸福を増進する爲め、有ゆる盡力をせねばならぬ。これは管に道理に合ふ望ましきことであるのみならず、亦實際其目當とする所を成就するに

工夫目論
見を神に
献げよ

古人の信
仰

必要のことである。

神は人を此世及び彼世にて救ふ上に、それくの方法條件を定めてお出でなさる。而して若し之を倉末にするに於ては、人を此世にて義人となし、又來世にて天國に入らしむる望はない。それ故諸君は此等の條件方法を辨へ、ぬかりなく之を履行し、出来る丈實際的に又有効に之を應用せねばならぬ。例は諸君が家を建るなり、集會を營むなり、其他何等かの行動をするには、必ず之に必要なる工夫目論見を立て、成る丈手落なく計畫をするであらう。これは大切なることである。さり信らそれと同時に、我等は喜んで此等の工夫目論見をエホバの御足の下に置かねばならぬ。而して其れが申分なく出來て居るからでなく、全く活ける神が之を祝福し給ふ故に、成功すべきことを信する様でなくてはならぬ。

此の如きものが、即ちエノク、アブラハム、モーセ、ダビデ、パウロ、殉教者、及び凡て彼等に倣へる神の前に力ある人々の信仰であつた。彼等は計畫を定め、

四五

規律を立て、其人民に命令し、其軍を戦ひ、而して其身命を擲つたものである。それと同時に彼等は肉の眼にて見る可からざる神を認め、之に由て支へられ、又保たれたるものである。彼等の信仰は此世の智慧分別や又は人間の力以上のものであつた。それ故一切の頼みが絶果たる時にも、能く神を信するに由て凡てに勝得たるものである。されば我軍人よ、諸君も亦神を信じねばならぬ。銘々箇々前に言ふ如き眞の信仰を抱け。さすれば諸君は又必ず前に言ふ如き勝利を得るに相違ない。

(七) 信 仰 (三)

信仰の權
第一、神の愛を信する事

余は尙引續き同じ「信仰」といふ題目に就て考へ度と思ふ。而して此度は凡ての救世軍人が片時も忘れてならぬ、神に對する實際上の信仰七箇條を數へ擧げるであらう。これは我等が始終目をとめて注意すべきもの故、之を「信仰の標的」と名けても可。これは又我等が實際上眞實なりと主張する特權を有する事柄故、之を「信仰の權利」と呼んでも差支ないのである。即ち左の如し。

第一、凡ての救世軍人は神が如何なる時にも我を愛し、我が凡ての福祉に關し正確眞實なる注意を拂ふて居給ふことを信するの權利がある。假令我身の上に幾らか此信仰と矛盾する如く見ゆる所があるとも、決して其爲めに心を動かすことは出来ない。「我が天の父は我を愛し、我が現在及び永遠の救を十分に用意して居り給ふ。只我から進んで受けさへすれば、神は必ず之を我に授け給ふに相違ない」

といふ、これが我等の信仰でなくてはならぬ。諸君はこれを信するであらうか。若し然うでないならば今直ちに斯かる信仰を有つ事が出来る。而してこれは耶穌基督の「神を信せよ」といふ御語の中に、第一に命せられたる所である。

第二、凡て眞の救世軍人は、又神が現在我が罪を赦して居給ふと信する権利を有つものである。余は凡ての救世軍人が、我は我が罪を赦されん事を願ふとか、又は神が我が罪を赦さんと望み給ふことを信するとか、いふ許りでなく。進んで我は今慥かに我が罪を赦され居れりとの信仰を有つべき筈だといふのである。若し諸君が眞の救世軍人であるならば、諸君は凡ての罪を棄て、己を神への御奉公の爲めに献げ、耶穌基督を我が救主として受入れ、今は服従の精神を以て生きて居るべき筈である。果して此の如くなれば、諸君は大膽に、これ迄犯したる凡ての罪は皆赦されたりと信すべき権利がある。假令諸君の犯せる罪は、其數が多く、其性質が悪しく、其他人に及ばす感化が危険にして、其結果は地獄に墮るべき可きも

のであつたとするも、諸君は尙神がそれ等凡ての罪を、其記録より抹し給ふたと信する権利がある。此等の罪は皆消滅して、最早再び取たゞさるべき恐れがないのである。余は諸君が以前にいつか、神より罪を赦され、其家族の一人、又十字架の一兵士として受入れられたりと信仰した事があるか、否やを問ふのでない。併し乍ら諸君が今日只今然ういふ信仰を有つて居るか、否やと尋ねるのである。若し左もなくば、諸君は時を遷さず此恩恵をうけ、今から斯かる實驗を得たりとの信仰を有つべき権利がある。

第三、諸君が既に斯く凡ての悪き道を離れ、身を神の奉事の爲めに献げたりとの證を、其胸中に有つに於ては。諸君は又随つて今後身に襲ひ来る一切の誘惑に打ち勝つに必要なる、凡ての助けを神より與へらるゝと信するの権利がある。假令其誘惑は己が肉慾より来るにもせよ、又は惡魔の策略より来るにもせよ、諸君は神が凡て其眼前に現はれ来る敵に對し勝利者たらせ給ふと信することが出来る。

諸君の叫び聲は「勝利！ 羔の血によれる勝利！」といふことでなくてはならぬ。諸君は之を信するであらうか。

第四、凡て熱心に聖潔の恵を求め、神と人とに對する職分を行はんと志す救世軍人は、耶穌基督の血が、立ち所に我を凡ての罪より潔むると信するの權利がある。或は一旦潔められたる後疑惑に陥ることあり、悪魔は又諸君が聖潔を得て居るといふ事實に、異議を挟む如きこともあらう。さり乍ら斯る場合にも、諸君が唯最初の従順なる献身の態度をさへ持續して居るならば、聖靈は其をりくりに諸君の心を潔くし、之を保たせ給ふものである。我が軍人よ、諸君は聖潔を信するか。諸君は平生聖潔を歌ひ、その爲めに祈り、又之を證言して居る。さり乍ら諸君は果して眞實に耶穌の血が我等を潔むることを信じて居るか。オ、諸君の献身をして實際的のものであらしめよ。若し今此點に於て聊さかでも不確實な所あらば、懼れず、惑はず、進んで神が諸君の心を支配し、之を深く保ち給ふ力を

信じねばならぬ。

第五、若し又諸君が救主を輔けて罪人を救ひ、聖國を擴むる爲めに献身して居るに於ては、諸君は神が諸君と合同し、凡て其爲す所のことを榮しめ給ふと信すべき權利がある。此大切なる眞理に就ては耶穌が自から語り給ふた語に、「されば爾曹惡しき者ながら、善き賜を其子に與ふるを知る、まして天に在す爾曹の父は求むる者に聖靈を予へざらん乎。」又「彼即ち眞理の靈の來らん時、凡ての眞理を爾曹に知らしむべし。」などあるは適切なる教訓である。我が軍人よ、こゝが眞正の救世軍人たる諸君に最も大事な處である。諸君が聖靈を求めらば、天の父は其求むるものを予へざらん乎との御約束である。それ故疑ふことなく「神を信じ」ねばならぬ。而して自ら言へ「我は靈を受けて居る、神は我と偕に在りて、我と偕に働き、一切萬事に於て我を勝利者たらしめ給ふ」と。此點に於て諸君は其感情の如何を氣にしてはならぬ。我等は感情によりて歩まず、信仰に由て生く

第六、攝
理を信ず
る事

るものである。

第六、諸君が眞正の救世軍人であるならば、諸君は神を愛するであらう。随つて其御約束通り神は諸君の身の上萬般の事を都合よく計らひ、凡て諸君の眞實の利益となる様仕向け給ふと信すべき、犯すべからざる權利がある。諸君は得るも、失ふも、病むも、健かなるも、親しき人に死別るゝ如き場合にも、凡て我身に落ち來る運命は皆神の御支配の下にあるものにて、つまり悉く働きて、此世及び來世に於ける諸君の益となるべきことを信する權利がある。諸君は之を信するであらうか。第七、諸君は又斷ず神に誠を盡して居るに於ては、神は諸君を死に至る迄忠實に保護し、死ぬるいまはの際には諸君を支へ、終に安然に永遠の彼岸に到着せしめ給ふと信じ得べく、又信じねばならぬ筈である。なせかといふに「神を信せよ」と宣ふたる同じ主は又「爾曹の父は喜びて國を爾曹に與へ給はん」と、仰せられて居るからである。

第七、永
生を信ず
る事

(八) 信 仰 (四)

余は前に神に對する信仰は世界の最も單純なるものであることを語り出でた。それにも關らず、多くの人は之を非常に難儀なことの如く持て餘して居る。それ故余は今然ういふ人々の爲めに少しく忠告を試みたいと思ふ。これは余自ら経験したる所を諸君に勧誘するのである。

第一、己
を獻げよ

第一 先づ大切なるは諸君が神から示されたる御旨を悉く實行せん爲め、殘す所なく己を獻ぐることである。一心に神に信頼せんことを努めねばならぬ。如何なる場合にも、神が來りて其心に宿り給ふとの、有難き思召を疑ひ訝かる如きことがあつてはならぬ。

第二、神
を知らん
こと努め

第二、心を盡して神の品性と力と其御業とを知らん事を努めねばならぬ。諸君が神を知らば知るほど、一層之れに信頼するに至るであらう。多くの人が神に頼

第三、己に對する聖旨を知るべし

第四、條件を履行すべし

自ら助くべし

ることを困難に覺ゆるわけは、其神に就て知る所が至つて少ないからである。

第三、殊に諸君は神が現在如何なる祝福を我に與へんと望み、且用意して居給ふかを見出さねばならぬ。時としては救世軍士官の中にさへ、神の御約束を一向知らぬ爲め、それが實地に成就せらるべきことをも信仰し兼ねる者がある。それ故我等に大切なるは努めて神の聖旨を知るべきことである。

第四、次に心得べきは、自他の上に神の祝福の下らんことを信仰すると同時に、いつも、それに必要な條件を履行することである。例は或救世軍兵士が其の身の上に難儀な事ある時、神が自分を助け給ふと信するに於ては、亦自分から其難儀を免がる、爲めに出来る丈の事をせねばならぬ。即ち其兵士が或は職業を求めるときか、又は我が兒の病氣の快復を祈るなど、何か神に願ひ求むる所があるとするば、彼は番に神が其所祈を聴き給ふことを信するのみならず、亦自ら進んで其爲めに己が當然の自分を盡さねばならぬ。若し然うでなくば神は左様なる二心の信

自らを深くせよ

仰を受け納れ給はぬであらう。信仰は勤勞なくして立つこと能はず、勤勞は又信仰なくして用をなさざるものである。神は此二つの者の相伴ふことを要めて居給ふ。或は又他に一人の兵士があり、只管聖潔の恵を求めて居ると致さう。然るに其兵士が若し一切の悪と心付きたることをふり棄て、善と認むる所を行ひ、實行を以て信仰を助けなければ、決して聖き生涯に入る事は出来ない。なせかと云ふに、聖書には「自らを深くして聖潔きことを成就すべし」(哥後七〇一)とあり。「自らを深く」しない程の人は、亦決して「聖潔き事を成就す」ることが出来ぬ筈だからである。或は又他の兵士があつて、大に其附近の人々を動かさし、多くの靈魂を救に入らしめんことを願ひ求むると致さう。かゝる場合に其兵士は唯神が然かなし給ふと信するのみならず、亦自ら助けて其力の限り、彼等の救の爲めに盡瘁する所がなくてはならぬ。使徒パウロの言に「我は蒔き、アポロは澆ぐ、そだつる者は神也」といふことがある。之は人々の勤勞と神の業とが兩々相待つて行くべき

黒人サン
友人

ことを言現はしたる語である。それ故余がいつも言ふ如く、信仰と勤勞とは、たとへば左右の足の如く、常に其釣合を保つて進まねばならぬ。信仰、勤勞、信仰、勤勞と、之れを繼續して行くのが我等の足並である。一本足では長く歩めるものではない。宜しく諸君が精神上の兩の足を用ゐよ。それに就て面白い話がある。或時二人の黒人が途を行く時、話はいつしか宗教上の問題に及んだ。一人の黒人が言ふには「何でも人は、自分に出來る丈のことをして神様に頼らねば、神様もそんな懶惰者を助け給ふものでない。」すると今一人の黒人が言ふには「併し幾ら人間が骨折つた處で、力が足りないからどうせ碌なことは出來ない、己は自分に出來る事など、瘦我慢を張らず、何が何でも只管神様にのみ頼る主義だ」と。語り合ふで居る矢先へ、忽ち一頭の大きな狂犬が飛んで來た。其勢があまりすさまじいので、二人の黒人は思はず路傍の叢に身を隠し、狂犬の通り過るのを待つたが、後に其一人が他の黒人に言ふには「それ見よ、サンポー、お前は今人間は力が足り

第五、聖書の見

ないから、自分に出來る事などと瘦我慢を張らず、何が何でも只管神様に頼るといふ口の下から、それでも狂犬が來た時には、自分で身をかはしたではないか、矢張自分に出來る丈のことはお前だつてするのであらう」と、いふたさうである。此の如く人が神と協力して働くことは、神が人を相手の御働の條件である。それ故諸君が若し其信仰の如く神の助けを得たいとならば、亦自ら助けて己が本分を全うせん爲めに其力を盡さねばならぬ。

第五、又聖書を開いて、神が昔其人民に由て成し給ふたる驚くべき御業を思へ。エノクを見よ、ノアを見よ、ギテオンを見よ、ダニエルを見よ、其他の人々に由て成し給ふた不思議なる御業を考へよ。或は神が使徒や、殉教者や、凡て世の救の爲めに生きたる人々を用ゐて、何をなし給ふたかを思ひめぐらせ。彼は偏り給ふことなき御方であるの必らずや古人に與へたると同じ恵を、亦今時の我等にも與へ給ふであらう。それ故に神に對ひて叫び求めよ。而して曰へ「オ、神よ我を信仰

第六、現在の信仰を
活用すべし

第七、信仰の増
進を祈れ

に満ちたるもの、一人となせよ」と。

第六、諸君は又現在有する信仰を活用せねばならぬ。これは此貴き賜を尙も増し加へらるゝ上に、最も確實なる方法である。基督も「有てる者は予へられて餘りあり、有たぬ者は其有てる者をも奪らるゝ也」と仰せられて居る。これは今有てる信仰を活用する者には、更に大なる信仰を興へられ、之を活用せざる者は、やがて今有てる信仰をさへも奪ひ去らるゝといふ意味である。

第七、断えず其信仰の増さんことを神に祈り求めねばならぬ。神は祈禱を聴き給ふ御方である。昔ペテロが「我等に信を増し給へ」との願に應へ、彼をして世界あつて以來、殆んど比べものなき程力ある信仰の人とならせ給ふた例もある。されば神は亦必らず諸君の祈禱に應へ給ふに相違ない。

ヨハネ三
の十六

獨子を賜
ふは何

(九) 神の賜

余は今度々引用せらるゝ聖書の一句、約翰傳三章十六節に就て、諸君に語りたいと思ふ。

夫れ神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ぶる事なくして永生を受けしめんが爲なり。

此聖書の句程屢々基督信者の口にのぼりたる語はない。之は尊敬を以て味ふべき句である。又全世界に宣べ傳へらるべき真理である。而して天の使が今日も明日も永遠の世迄も、ほめうたふて尙足ざる程偉大にして又肝要なる音信である。

それは又何故か、神は一體何を此世の人の爲になし給ふたといふのであるか。其生み給へる獨子を賜ふとは、どういふ意味の語であるか。此事に就ては今日迄随分と多く其説明しをなし、講義をなしたる者もあれど、それにも關らず、其實

種々なる
誤解あり

六〇
實際的の教訓又眞の意味は、案外等閑にせられて居る如き恐れがある。或は耶穌が世に降り給ふた事を唯神の怒を宥むる爲めであつた如く思ふ者あり。或は耶穌が一度我等に代つて死んで下された故、我等は唯之を信仰さへすれば其他の事は何うであらうと、必ず天國に入れるもの、如く考へて居るものもある。併し乍ら此の如きは決して神が耶穌を賜ふたる眞の精神でない。神は我等の父である故、唯罪人を怒り憎んで之が敵となり給ふお方でない。随つて耶穌は唯神の怒を宥むる爲めにのみ十字架にかゝり給ふ筈がない。又我等が如何に耶穌を信じたればとて、自分自ら信仰の生涯を送り、基督に似たる人とならざば、それは徒らなる信仰といふものにて一向實際に益なきことである。

それ故余は此誰もよく承知して居る句に就て、今改めて少しく考へて見たいと思ふ。かくすることに由て、諸君は必ず相應の利益を得るに相違ない。先づ神が耶穌を賜ひたることに就き、聖書には何と教へてあるかを考へねばならぬ。

第一、我
等を教へ
しめん爲
め也

ぬ。

第一、神は世の人が、罪に就き、義に就き、來るべき審判に就き、如何に愚かにして辨へなきかを見、其獨子耶穌基督を遣つて彼等の迷を解き、之に救の道を教へさせ給ふこととなつた。神は世の人がされ丈のことを知る必要あるか、又如何なる方法にて之を彼等に教へるのが、最も適當かといふ事をよく御存知である。而して其結果耶穌は我等を教へる爲めに、此世に來り給ふたものである。約翰傳の首章に、「太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神なり。」夫れ道肉體となりて、我儕の間に寄れり」などあるのは此事である。即ち我等お互が言語に由て其思を通ずる如く、耶穌は神の思召を我等に教へ示す所の「道」であつた。第二、次に神は又、人が其學び且行ふべき眞理を實際に示す模範があれば、これに倣ふことが甚だ容易であるのを見て、耶穌を此世に降し給ふたものである。それ故、耶穌は我等を教ふる教師であると共に、亦我等が倣ふべき所の模範である。

第二、我
等の模範
たる爲め也

第三、我等を救はしめんとす

第三、神は又人が斯くして救へ示されたる聖き生涯に入る前に、先づ既往の罪を赦されて居るべき必要を認め給ふた。元來人は我と我が身の罪を贖ふ力のないものである。涙も、祈も、犯せる罪を如何ともすることが出来ない。そこで神は基督を興へて、我等の罪の身代りとなし、一方には悪を行ふことが如何に恐ろしいものかといふことを示し、一方には悔改めて其赦を求むる者を救ふべきの道を立て給ふたのである。

此の如く神は、第一、我等の教師とする爲め、第二、模範とする爲め、第三、贖とならしむる爲に、獨子基督を降し給ふたといふのは、如何にも行届いて且大なる愛ではないか。

約翰傳三章十六節は即ち此大なる神の愛と、又其貴き賜の事を示すものである。これは極めて明白にして疑ふ餘地のない眞理である。然らば此大なる神の愛は諸君個々の身の上には果して如何なる關係があるか。

諸君は基督の心を

救世軍人よ、諸君は神に従ひ其靈を胸に宿す者であるといひ、又此世の無智にして罪の穢れに染める同胞を愛すると唱へて居る。それは唯言語の上の事であるか、或は實際の事實であるか。今神は此世の人を愛するが故に、其獨子をさへ惜まず、我等の爲めに賜ふたといふのである。諸君に於ては如何。果して此世の人を愛することを事實の上に證明の出来る様な實行があるか。余は諸君が此點に就て十分自ら省る所あらん事を望むのである。

第一、他人の爲めを思ふ

第一、諸君は果して他人を愛し、眞面目に其身の上を考へて居るであらうか。彼等の罪に就き、其禍に就き、其危険に就き、又其來らんとする滅亡に就き、諸君は思案することがあるか。勿論諸君は平生其胸の中に種々様々の事を思案して居るに相違ない。それと同時に、神の榮と罪になやむ靈魂の上をも少しは注意すべき筈ではないか。例へば諸君は毎日朝か又は晩に、せめて數分間なりとも別にして、其時には世の人の罪と悲みと又神が其爲めに與へ給ひし犠牲のことなど、思

第二、他人の爲めに憂ふる

ひめぐらす位は諸君に出来ることである、又諸君が必ず爲さねばならぬ事である。
第二、次に諸君は果して他人を愛して、之に同情同感を有つであらうか。諸君は周圍にある罪人の爲めに心を動かし、彼等の爲めに憂へて居るか。諸君は世の人が天の父の愛を忘れ、其獨子の血をふみ付にして居るのを見て、其爲めに一滴の涙を流したことがあるか。諸君は罪と惡とに身を委ね「瀾き滅亡の道」を驕地に馳せ行く人々を見て、悲みを催したことがあるか。又は亡ぶる世の有様を見て心を傷めたことがあるか。

第三、他人の救の爲めに勞する

第三、諸君は又世の人を愛し彼等の救の爲めに力を盡して居るであらうか。大方、諸君は皆必死に其家業を勤めて居る人々であらう。さり乍ら如何に終日の骨折に疲れた晩であればとて、若し其隣家に火事が始まり、あぶなく焚死さうな人でもあつたとすれば、飛んで行つて之が救の爲めに働かすには居られないであらう。然らば諸君は又罪人を滅亡の火より曳出す爲めに力を盡さねばならぬ。野外に、會

時を得るも時を得ざるも

館に、公園に、又は家庭に、或は少年の間に、知人朋輩の中に、彼等の救の爲めに戦はねばならぬ。一言にいへば、諸君は時を得るも、時を得ざるも、世の人の救の爲めに戦はねばならぬ。天の父は世の人を愛し、之が救の爲めに其獨子を與へ給ふた。其如く諸君は亦其爲めに我が子女を與へるであらうか。若し神が喜んで其獨子を賜ふたとすれば、諸君は亦快く其最愛の者を世の救の爲めに献ぐべき筈ではないか。或は我等には士官學校にやる程の大きな子女がありませぬといふか。然らば其幼ない兒等は何うであるか、或は其他の献ぐれば献げらるべき者共は何うなつて居るか。諸君は果して彼等を世の救の爲めに献げて居り、又は世の救の爲めに献げたものとして養育して居るであらうか。

第四、金の爲めに救金を献ぐ

第四、今一つ前同様の實際問題がある。それは諸君がどれ丈世の人を愛し、其救の爲めに金を献げて居るかといふことである。諸君は平生何ういふ風に神と人ととの爲めに献金して居るか。今日若し召されて神の前に出で、天の使の前に其献金

の高を讀み上げられたとすれば、諸君は顔を赧らめて恐れ入るであらうか。それとも亦反對に喜び躍つて神を讚美する事が出来るであらうか。

我が軍人よ、神は其獨子を與へ給ふたのである。其生み給へる獨子をさへ賜ふて、亡ぶる世の救の爲めに、生き、苦しみ、又死なせ給ふたのである。諸君はこれ迄、其爲めに何を與へたであらうか。又今日其爲めに何を與へて居るであらうか。

或は諸君の中に余の問に答へて「さり乍ら我が力量は乏しく、我所有は少く、獻ぐべき金とては一向ありませぬ」と、言ふ者があり。而してそれは又實際の事實であるかも知れない。けれども諸君が若し其有る丈の物を皆神の有として獻げ、之を唯聖旨の儘に最も善く用ゆれば足つて居る。神は其以上のことを求め給はない。而して諸君が斯く、今ある丈の物を最も善く用ゆるは、更に其以上の物を與へらるゝ方法である。即ち「有てる者は與へられて尙餘りあり」とは此事であ

其有てる
ものを皆
獻げよ

る。神は人が有て居ない物に就て何とも仰せられない。唯其現在手にある物を如何に扱ふかといふことを詮議し給ふのである。

されば來れ我が軍人よ、諸君は今一度献身の仕直しをせねばならぬ。先づ己自らを神に獻げ、次に、我が愛する者を獻げ、而して各々世の救の爲めに其分に應じて己が立場より力を盡し、又力を盡させて、戴く事を覺悟せねばならぬ。

(一〇) 羔の血 (上)

基督の血
凡ての罪
より我等
を潔む

救世軍人は常に耶穌基督の死を忝けなく感じて居る者である。我等の間にて最も多く引用せらるる、聖書の句は、大方「其子耶穌基督の血凡ての罪より我等を潔む」といふ使徒ヨハネの語にて。又最も多く歌はるる、軍歌は「すくひぬし耶穌の、血のいづみに、あらはれ罪人、きよめをうけん。」といふのであらうと考へる。我等は唯道理上耶穌基督の死を有難く思ひ、其血の色を表はす制服を着用したりなどするのでなく、實際その貴き血が我等の心と、生涯と、又家庭とに齎したる勝利を、感佩して居る者である。加之、我等は又同じ耶穌の血に其罪の穢れを洗はれたる人々が、我等以外にも尙數へ切れぬ程澤山ある事を思ひ、益々之を忝けなく覺ゆる次第である。此我等自からが耶穌の血に由て救はれたりといふ實際があれはこそ、我等は喜を以て次の如き歌をうたふのである。「我羔の血に洗

救世軍の
根本的眞
理

はれたり、我洗はれたり。卿等若し唯羔の血に洗はれなば、我等と同じく自由を得、幸福の人とならむ。」我等は又、此自ら耶穌の血に由りて救はれたりといふ實際に勵まされ、進んで他の人々をも同じ十字架の愛に導き、やがては水の海を掩へる如く、エホバを知るの智識が世界を掩ふ時代を來らしめん爲め、盡力せずしては止む能はざる次第である。此耶穌の血が罪人を救ふといふ教理は、救世軍の根本的眞理の一つである。唯余が恐るる所は、今の世の人が此眞理を握ること至つて弱く、之を宣へ傳ふることに至つて不十分ならん事である。此教理に就ては、今時の宗教家の中に不確實なる喇叭の音をたつる者が多くあり、滅多に主の血の事を語らず、偶々語り出ても之を曖昧模糊の中に葬り去る如き例も少からず、甚しきに至つては全く贖罪の教理を拒んで之を棄つる者さへある。而して余が恐るる所は、我救世軍の軍人さ

七〇
へ、其貴き血汐に對して有する單純なる信仰が、決して十二分に強固ではあるま
いかといふことである。

然らば世の人は何故、かく此點の信仰が不十分なのであるか。

第一、其第一の理由は世の人が此大切なる問題に關する道理を辨へず、又は誤解
して居る爲めである。それ故に余は今聊さか主の贖罪とは何か、又其功德は如何
なるものかといふことに付、説き明しを試みたいと思ふ。

(一) 基督の血が我等の罪を洗ふといふたからとて、それは救主が十字架に流し
給ふたる實際の血が、彼を信する者の心に働くといふのではない。それは到底不可
能事である。二千年前カルバリ山上に流されたる血の滴は、地に落ちて塵に混じ、
土に和して、夙くに痕跡もなくなつて居る。

(二) 又耶穌基督の血が我等の罪を贖ひ給ふといふたからとて、あなたがら我等が
其罪愆故に受くべき筈の刑罰を、耶穌が其當時悉皆身に受けてしまひ給ふたとい

ふわけでもない。

(三) 又は或人の言ふ如く、我等が犯せる罪愆故、正義の神に對して負へる負債
を、耶穌が其十字架の苦みによりて悉皆辨償し給ふたといふわけのものでない。
若し耶穌が悉皆我等の負債を辨償してしまひ給ふたとすれば、我等は最早其犠牲
の功德を納けても、拒んでも、そんなことには關係なく、兎にも角にも罪の咎め
と罰だけは、之を免れらるゝ様な事になるであらう。

(四) 又は基督の死は、我等が以來何を信じ、何を爲すとも、最早二度と再び恩
寵より離れて墮落し、滅亡に至る恐れなき有様に立至らしむるものと考へてはな
らぬ。

然らば耶穌基督の血は如何なる功德があるものかといふに。耶穌は其身を犠牲と
して現實に我等の罪の爲めに献げ、之に由りて神が悔改と、服従と、信仰とを以
て歸順する凡ての人を赦し給ふとも、律法の威信にも、亦人類の幸福にも戻るこ

第二、實
験を缺く
が爲め也

彼汝の爲
め此の爲
に汝は彼
の如くな
す何の爲
に

となき様に計らひ給ふたのである。

第二、次に世の人が何故基督の犠牲の教理を信せぬかといふ理由は、其心中に右
言ふ如き祝福と力との實驗を十分に有ぬからである。彼等は其犯せる罪の記録が、
救主の肋より流れ出づる貴き血汐にて洗ひ去られたりといふ、確實なる經驗なき
ものである。

其故如何。なせ彼等には此榮ある實驗がないか。彼等は基督が血を流して救はん
とし給ふ人々の數に漏れたのであるか。否、基督は凡ての人々の爲めに死の苦み
を嘗め給ふたのである、それ故彼等が確實なる救の實驗を有ぬ理由は、基督の側
面にあるのでなくて、言ふ迄もなく其當人達の側面にあるのである。即ち彼等が
救の恵を受けるに必要な條件を、身に引當て行はぬ爲めに此の如きものである。
基督は天の位を棄て此世に降り、厩に産まれ、槽の中に置かれ、野にて試みられ、
苦楚と嘲弄との中に生き存へ給ふたのである。基督はゲツセマ子の園にて泣き、

ラトの役所にて尋問せられ、其身を十字架にかけて迄も救はんとする目當の人々
から、却つて誣はれ罵られ給ふたのである。基督は又暗き墓に下り、蘇りて天に
歸り、今や其靈をおくりて人々の心の戸を叩き「我を容れよ」と懇ろに求めて居
給ふのである。それにも關らず、人々は耶穌の要求を聽いれず、其罪を棄て、彼
を世の人の前に證言し、又彼の爲めに戦争する者となることを厭ふて居る。
諸君は此點に於て何うであるか。諸君は光明の中を歩み、明るき世渡をして居る
であらうか。諸君は凡ての悪しき道をふり棄て、其心より凡ての偶像を去り、又
其凡ての罪を残らず貴き血汐に洗ひ潔められて居るか。若し然うでなくば、今は
恩恵の時である、今は救の日である。

(一一) 羔の血 (下)

余は先に羔の血といふ大切なる題目に就て、少しく考へたのであるが、今尙引續き、同じ眞理に就て語り、諸君が基督に由て彰はされたる天の父の愛を一層深く味ひ、之に由りて受けらるゝ限りの祝福を、其身に受けんことを勧誘し度と思ふのである。

便宜の爲め、余は再び耶穌基督の犠牲といふ教理の第一義に歸り、聊さか思慮をめぐらしたいと思ふ。

第一、神は統治者なり

第一、先づ注意すべきは、我等が皆神の御支配の下に在る臣民だといふことである。即ち我等は全能なる主エホバ神の、政治の下に生き存へるものである。

(一) 此世にて人の君たるものが、其國民の幸福の爲め、又社會の秩序を保つ爲めに、法律を定めて之を行ふ如く、神は又其御支配の下に在る人民を治むる爲めに、其守るべき相當の律法といふものを設けてお出なさる。

(二) 而して其律法の尊嚴を保ち、人々をして之に服従の義務を盡さしむる爲めには、之を破る者を罰する規定が必要である。之を破る者を罰することなき律法は、之を律法といふに足りない。此の如きものは唯善良なる忠告と呼ぶべきものである。随つて一向目當とする人民に大なる注意を促がす力なきものである。

(三) 切今日、世の人は皆、神の律法を破り、それに相當の刑罰を身に受くべきものとなつて居る。而して其刑罰とは即ち「永遠の死」である。

第二、然らば神が罪ある世の人のために、救の道を立て給ふとは、如何なる事であるかといふに。

(一) 之は人々が、其犯せる罪の爲めに受くべき恐ろしき刑罰より、彼等を救ひ出さん爲めの救である。

(二) 之は又彼等をして、善良、從順にして、神への奉事を勵む者となり、末は

第二、我等の救

天國に入らしめん爲めの救である。

(三) 之は又一面には憐れなる罪人を救ひ、其慈悲深き大御心を安んずると同時に、一面に於ては彼等が律法を破りたる爲め、刑罰を受くべき公義の要求を満さん爲めの御計らひである。

第三、耶穌基督の犠牲は、凡て前にいふ如き條件を十分満足せしむるものである。

(一) 神は基督の死によりて、天國と、此世と、地獄との住民に對し、其立て給ふたる律法を守ることが如何に大切にして、又之を破ることが如何に恐ろしきかを、十分に示し給ふことが出来た。

(二) 又神は基督の死により、凡て犯せる罪を悔改めて神に歸順し、其恩恵を受けて、神の獨子を信する者を救し、之を潔めて、其懐にうけ入れ給ふことが出来る様になつた。

(三) 又神は斯く迄忝けなき手段によりて救の道を開き給ふた故、他の如何なる

方法によるよりも愈りて、其憐憫と、恩恵と、愛とを人間に示し給ふことが出来たのである。

第四、然らば諸君各箇が、此最も大切なる問題に對する立場は如何。諸君が十字架の血汐に就ての實驗は如何。耶穌は諸君が天の父と和らぎ、此世にて聖き生涯を送りたる後、やがては天國に落着く様にとて、其爲めに死給ふたのである。昔チャールズ一世が斷頭臺上に頸刎られたる時、人々は之を以て殉教者の死となし、手巾を其血に浸し、紀念の爲めにとて永く之を保存したといふことである。今余が若しカルバリ山上の耶穌と偕に在り、手巾を其貴き血汐に浸し、彼が諸君の爲めに身命を擲ち給ふたる紀念として、之を諸君に贈ることが出来たとしたならば、どうであらう。

之は到底出来ぬ事である。さり乍ら少くとも、余が今改めて諸君に證明する事が出来るのは、彼是れ二千年前流れ出でたる救の泉が、今も昔と同じく流れ注いで

居ることである。それ故若し諸君の中、未だ過去に犯せる罪の記録を抹されず、又は其胸の中に隠れたる罪を蓄へ居るものがあらば、此場にて、直ちに、貴き血汐に洗ひ潔められよ。

(一一一) 變らぬ救主

余は今「變らぬ救主」といふことに就て、少しく語りたいたいと思ふ、其爲めに引用する聖書の語は「耶穌基督は昨日も今日も永遠も變らざる也」(來十三〇八)といふ一句である。

自然界の變化

此世の様は移り變つて居る。而して多くの變遷、變化は、至つて有益に且は興味のあるものである。今其一二の例を挙げば、こゝに時候の變化といふものがある。冬は春と變り、夏の次に秋が來ると思へば、間もなく又冬が來る。何んど面白くして趣味ある事ではないか。又天氣の變化といふものがある。人は兎角天氣に就て小言をいひたがる。我等の間にも同じ愚痴をいふものがないとは限らぬ。併し乍ら考へ方一つでは、此天氣の變化は至極結構なものである。餘り暑い日ばかり續いても、または寒い日ばかり來ても、困り入るので、矢張晴雨寒暑入りみだれ

て來るのが一番都合が好いのである。

或は貧乏人が金持となり、金持が貧乏人となり、束縛せられた人が自由になり、自由の人が束縛の身となるなど、我等が毎日見る所の出來事にて、此等も皆悉く人に益を與ふるものである。即ち「常に健康にして自由なる人は、健康と自由との價値を知らず」といふことがあるのは、かゝる場合に思ひ合はざる、語である。或は戦友、士官の移動といふものがある。之は救世軍人が常に經驗して居る處である。小隊長のみならず聯隊長の去るあり、來るあり、其他の上官の更迭するさへありて、斷ず新鮮快活なる運動をする助となる。或は少年が青年となり、青年が壯年となり、又老年となるのは、最も興味ある事實ではないか。若し此の如き變化なくして、人は皆成熟し切つたる男女として生れ出づるものであつたならば、此世は如何ばかり單調にして無趣味なことであらう。我等は然ういふ社會よりもたしかに現在の儘を喜ぶに相違ないと思ふ。

最後に人を此世から永遠の世界に移す死といふものがある。死は悲しき事實に相違ない。さりと乍ら地より天國に移さるべき幸福なる希望を有する我等に取りては、只いつまでも此世に留まることは固より其願ふ所でない。さり乍ら世には何う考へても、一向好ましからず、亦我等に益ありとも覺えぬ變化がある。

第一、例へばこゝに墮落といふことがある。即ち其初の誓を忘れ、神に對する約束を反古にし、軍旗を辱かしめ、天國の望を擲ち、救主を再び十字架にかくるものである。之は耻づくべく且厭ふべきの變化である。若し此文を讀む人々の中に、かゝる悲惨なる墮落の境涯に居る人があらば、速かに悔改めて主に歸らねばならぬ。オ、遠國の空にて、見るも痛はしき零落をなせる放蕩息子よ、起ちて其故郷の父に歸れ、今直ちに天の父の家に歸れ。

第二、或は親友お互の間柄に、以前と異なる、變化の生ずることがある。即ち前に

日本人の
家族制度

基督に心
變りあり
ば如何

は心も命も打ちむで、ダビデとヨナタンの交りも斯くやと思ふた程の友達が、今は仲違ひをして、とほくしくなり、果は互に顔をそむける仲となるといふは、如何に悲しむべきことではないか。殊にそれが同じ家族の間柄であつた場合には、尙更悲しむべき事である。余は先頃東洋に行きたる時、日本人、支那人等の間に親孝行の道を殊に重んじ、死んだ祖先をさへ大切にする風のあることを見て、血族相愛する事が如何に美はしきかを今更の様に感じたのである。病氣、老衰其他の理由により、勞働に堪えぬ人を、其子孫が厄介者扱ひにし、之を見棄て、勝手に難儀をさせ、神の誠命に「汝の父と母とを敬へ、これ汝等が地に於て命長からん爲め也」との大切なる義務を怠り、神の旨を痛むるは、如何に恐るべきことではないか。又は夫が妻に對する心を變へ、娘が母に對する愛を棄て、冷淡無頓着になる如きは、殆んど忍ぶ可らざることである。

さり乍ら若し我等の救主耶穌基督の御心が變り、最早以前の如く人の罪を赦さず、

未來永劫
變りあり
友

第一、降
生の時
異なる

天の父の前に取なすことをせず、靈を遣つて慰さむることを止め給ひ、義の太陽は再び照さず、恵の雨は重ねて降らぬ如きことがあつたら、何うであらう。人間の身の上は、これ程つらい、悲しい、出來事が復とあらうか。諸君はかゝる有様を十分には想像することさへ出來ぬのである。

さり乍ら千萬度も、聲高らかにハレルヤを唱へよ。こゝに未來永劫、變ることなき一人の友があり、其名を耶穌と呼び奉るのである。或る古い歌に「彼は他の何人よりも愈りて我等を愛す、彼の愛は兄弟にも愈れり、世の人は心變りすることあり、今日笑顔で以て迎ふると思へば、明日は却つて我等を欺く、されど彼のみはいつまでも我等を見棄てず、彼の愛は如何に深いかな」といふてある。此の如く救主耶穌基督は、いつも變ることなき我等の友である。今其意味を、も少し精しく御話申さう。

第一、救主耶穌は天の位を棄て、我等の救の爲めに此世に降り、諸君、今此文を

讀む諸君をさへ愛し、其爲めに身を卑くして有ゆる難儀苦勞を忍び、嘲られ、罵られ、迫められつゝ、一生を過し給ふた。之は確實にして疑ふべからざる事實である。耶穌は實に諸君を憐んで其救の爲めに世に來りたまふたものである。而して余は諸君が此耶穌の大なる愛の、今も當時と變らぬことを、十分に考へ又味はんことを願ふのである。耶穌は諸君の價値なきことを知り、前以て諸君の不忠實を認め、其愛に報うることも亦極めて不十分なるべきことを萬々承知の上にて、態態此世に來り給ふたのである。而して此大なる愛は今日迄聊さかも變りがない。耶穌は諸君を見棄て給はず、其憐愍にはいつ迄も變化がない。耶穌は昨日も今日も永遠變らぬ御方である。

第二、耶穌は又嘗て諸君の爲めにカルバリ山の上に死給ふたる當時と同じく、今も諸君を愛して居給ふ。ヨブ記に「人は其一切の所有物を以て己の命に換ふべし」(百二〇二)といふことがある。さり乍ら耶穌は諸君の爲めに其生命を與へ給ふたの

第二、受難の時
さ異なら

である。之は如何にも大なる愛ではないか。或は諸君を救ふ爲めに金を予へ、時間を費やし、又は財産を擲つことを厭はぬものがあるかも知らぬ。併し乍ら其爲めにかけてがへのない命を予へ得る人といふては滅多にない。けれ共耶穌は諸君の爲めに其貴き命を棄て給ふたのである。之は如何にも大なる愛ではないか。而して其耶穌は今も變り給はぬのである。耶穌は十字架の上に、諸君の爲めに其聖旨を痛め給ふたる當時と同じく、今も諸君を愛して居給ふ。これは如何にも「驚くべきの愛」ではないか。

第三、耶穌は又嘗て諸君を召して、神の子とならせ給ふたる當時と同じく、今も諸君を愛して居給ふ。諸君は其以前耶穌が「我に従へ」と命じ給ふたる時、又「汝の罪赦されたり」と、心の耳に囁き給ふたる當時の事を憶えて居るであらう。ア、それこそ眞に勿體なくも亦忝けなき一時であつた。然るに耶穌は今も其當時と全く同じ愛を以て諸君を顧み給ふのである。耶穌は心變りして諸君を見放す如き御

第三、救
はれし時
さ異なら

方でない。

さり乍らこゝに一つ、余が諸君に問ひ度きことがあるといふは他でもない。耶穌に心變りのなきことは前にも述ぶる通りであるが、諸君の方は何うかといふことである。

諸君の方に心變りはないか、諸君は耶穌に對して常に其誠實を盡して居るであらうか。諸君は嘗て耶穌を愛し、之を拜み、之を讚め、大なる喜を以て出くはす程の人々に耶穌の愛を告げて居つたことがある。今はすなはち如何。果して其當時と同じく耶穌を崇めて居るであらうか。諸君は又嘗て耶穌に事へて居つた。即ち耶穌の爲めに町の辻に立ち、之を證言し、之が爲に時を用ゐ、其御用の爲めに兒供を献げ、又己が身を献ぐることを喜んだ時代があつたであらう、今も其如く耶穌の爲めに盡すことは、果して諸君の喜び又樂みであるか。若し果して然りといふことが出来るならば、余は諸君と共に之を喜び祝ふであらう。

諸君に心變りなき

さり乍ら若し寸分にても諸君の「證」が動搖し、其心の喜と有用なる奉事とに變化が來て居るならば、其責任は全く諸君にあつて、決して耶穌基督の側面にはないのである。なせかといふに「耶穌基督は昨日も、今日も、いつまでも變ることなき」御方だからである。

(二三) 義人

義人は幸福の人も

余は此頃義しき人の幸福といふことに就て、種々思案をめぐらして居たのである。聖書には義しき人の幸福なる身の上に就き色々教へてある。即ち義しき人は生きて居る間幸福にして、死ぬる時にも幸福に、而して又死んだ先、永遠の世に於ても幸福なるべき事を説いて居る。今其數多くある中から、二三の聖句を擧ぐれば次の如し、「義しき者は棕櫚の木に如く榮え、レバノンの香柏の如く育つべし。彼等は年老て尚果を結び、豊かに濕ひ、緑の色みちちくしてエホバの直きものなるを示すべし。」(詩九二〇十二、十四、十五)「義しき者は其死ぬる時にも望あり。」(箴十四〇三三)「義しき者は永く忘れらるゝことなかるべし。」(詩一二二〇六)而して主耶穌の御言葉には又「義しき者は永生に入るべし。」(太二五〇四六)と仰せられて居る。それ故義しき人は假令一時悲み、苦み、又は迫害に遭ふ如きことがあるとも、末始

願くは一人の義人

義人の要性如何

終は萬事必ず好都合に成行くものである。それ故預言者イザヤは「汝等義しき人に言へ、必ず福祉を受けんと、彼等は其行の實を食ふべければなり。」(賽三〇十)と言た様な次第である。我等は銘々此義しき人の一人に數へらるゝに足る資格を有りたいものである。我は義しき人の一人なりと胸に覺えらるゝは嬉しいことである。又我は神が義しき人と認め給ふ仲間仲間に屬する者であると感ずることは、人間一生の道中にて出會ふ難儀苦勞に堪ゆる力ちからもなり、死ぬるいまはの際の慰めなぐさもなり、亦懼るゝ所なく大なる審判の座ざに立つ望のぞみともなるものである。然らば我等は如何にして、眞の義しき人の生涯を送ることが出来るかといふに、それには種々心得て置くべきことがある。一體義しき人たるには、義しき人たる資格が必要である。身に義しからざることを行ひ乍ら、義しき人のつもりになることは出来ない。世には自分のことを最負

口頭の事
にあらず

義人の思
想行動

目に見て、始終自分を立派な人物にして置かふと努め、それが出来そこねて、實際は年中我が本心に責められて居る如き人が多くある。さう乍ら此の如きものは固より義しき人でも何でも無い。諸君は義しき行なしに義しき人の仲間に加はることは出来ない。又義しき行なしに義しき人の待遇を受け、義しき人に約束せられたる恩寵を受けることは出来ない。

これは口先のことでなくて、躬行實踐の問題である。それ故茲に人あり「余は真に義しき人とならんことを望む。余は之が爲めに祈り、之れが爲に盡し、又聖書を読んで其中に在る神の誠と約束とを辨へて居る。余は義しき人々と交際して居る。余は教會に屬し、或は救世軍に屬するものである」と、かやうに言ひはやし、又實際其通りを行ふて居るとしても。未だそれ丈では義しき人たるの資格なく、又神の前に義しき人の一人と見做さるゝ價値なきものもあらう。義しき人は義しき思想を有する者である。随つて義しきことを好み、惡を憎むも

九〇

義せら
れたる人
への注意
五箇條

のである。又神に對し、隣人に對し、両親に對し、妻に對し、子女に對し、友人に對し、主人に對し、僕に對して、いつも義しき行をなすものである。一言にいへば、義しき人は自から眞實正義と認めぬ以上、何事をも行はず、何物をも着ず、食はず、何處へも行かず、誰とも交らず、誰をも友とせず、又如何なる働きをもなさぬ人である。

義しき人は又其身體、精神、靈魂を害し、神の子たる好感化を傷け、又神に事ふる熱心を損ずる如きものには、一切手をふれず、之を味はず、之れを讀まざるものである。

義しき人は又他人の爲めを思ふものである。即ち貧乏人を憐み、道樂者の爲めに面倒を見、墮落したる信者の爲めに泣き、而して主の榮を揚げ、罪人を救ふ爲めに骨折り、且戰爭するものである。

借我が兄弟よ、我が姉妹よ、かく考へた處にて諸君は果して義しき人の仲間

九一

して居るか、どうであるか。若し屬して居るならば喜べ、大に喜べ。それと同時に萬事義しき人たるに相當の實行を現はさねばならぬ。今かゝる人々に注意すべき箇條は左の如し。

(一) 我等は自ら義とする者となつてはならぬ。人を義しき人とする事は全く神の御働きである。我等は自分免許の義人たることを以て満足してはならぬ。

(二) 又神の大なる恵により、一旦義しき人になりたればとて、それで好い氣になり、最初其恵を受けた時に實行したる條々を、今更忘却する如きことがあつてはならぬ。我等は尙も信仰を保たねばならぬ。己に克ち日々十字架を負ふことを怠つてはならぬ。

(三) 我等は又引續き、信仰と、愛と、神を識るの智恵とに進歩して居らざば、其義しき人たる資格を維持し難きことを辨へ、斷ず奮發盡力せねばならぬ。進まざるものは退く。義しき人の生涯には中間の立往生といふことを許さぬものである。

(四) 他人の事を彼是と審判してはならぬ。殊に愚かにして道理の分り難い人々を、我が高尚なる標準に比べて、責め立つる如きことがあつてはならぬ。却つて多く與へらるゝ者は多く求めらるゝことを考へ、専ら己が務を全ふせんことを心がけよ。

(五) 又凡ての功績と榮譽とを、聖靈に歸し奉つることを怠つてはならぬ。諸君が善良にして、高潔なる人物となり、其心が基督に似るといふは、悉く聖靈の御働によりて出来ることである。

が併し乍ら右言ふたる事柄は、既に義しき人の仲間入をして居る者に對しての忠告である。然るに諸君が若し自ら省みて、余は未だ義しき人の數に入つて居らぬ、今も尙心に惡を思ひ、身に惡を行ふて居る、又善を知て行はず、義しきことを爲さんと望めども、其力なき者であると、心づくであらうか。我兄弟よ、我姉妹よ、余が今諸君に忠告すべき事柄は左の如くである。

義せら
れざる者
への注意
三箇條

(一) 正直に己が悪を神に懺悔なされ。これは義しき人となるの手初めである。

(二) 又これ迄自分が行ふて居りたる、凡て本心に違ふ事を悉く思ひめぐらして、今直ちにそれと縁を切り、未來永劫、重ねて之を見返へらぬ決心をせねばならぬ。

(三) 神が己を義しき人となし給はんことを祈り、以來義しき事をなす爲めに、身を盡し心を盡す覺悟をせねばならぬ。

若し諸君が右言ふ通りを忠實に履行するならば、それは諸君の爲めに、此世にても又來世にても最も宜しき事である。なせかと云ふに神は、「汝等義しき人に言へ、必ず福祉を受けん」と、仰せられて居るからである。

(一四) 靈の證

悟の天國を
談するこ
と勿れ

世には、死んだら屹度天國に行くといふことを、容易に口に出して言ふ人がある。果して實際に然ういふ確實な目當があつての話ならば、それは結構の事である。さり乍ら之は然う輕々しく口に出して言ひ得べき事ではなく、少く共輕々しく口に出して言ひ得ぬのが、通常我等の實驗である。

若し天國迄直通の列車があり、一度切符を求めて乗込みさへすれば、大丈夫目的地に到着するといふ性質のものであれば、それは如何にも氣樂な旅行である。併し乍ら余は未だ左様な特權を有する仕合者に出會ふ事がない。

一體人が天國に入るには、此世にて死に至る迄忠信なる事が大切である。而して此の如き忠信は固より一寸でも油断があつては出来ぬことである。それ故に諸君は常に目を醒まし且祈禱せねばならぬ。若し之を怠れば中途に挫けて天國に入り

此世にて
有すべき
靈の証

第一、新
りに生れ
た証

道行は異
なるも歸
する所
は同じ

第二、神
の子たり
の証

損ふ恐がある。所謂「自ら立てりと思ふ者は倒れざる様慎むべし」とは、此事ではないか。

右の次第故、人は天國に入つて見る迄は大丈夫だなど、油断すべき暇はなく、又如何に信仰に進みたればとて、最早墮落の心配がないと氣をゆるして可い時はないものである。さり乍ら同時に諸君は、現在此世に生きて居る間に、確實に樂むことの出来る二つ三つの恩恵がある。

第一、諸君は確實に更生りたる人となる事が出来る。即ち古への使徒が言ふたる如く、闇黒より光明に移り、死より生命に入り、悪魔の權力を離れて神の御支配を受けるものとなる事が出来るのである。諸君はいつか、神の前に跪いて其犯せる罪を悔改め、其權威の下に身を投げ出して只管救主に縋り、罪の赦を得て、以來は神の御爲めに世俗や地獄に敵對して戦ふものとなつて居るであらうか。之は驚くべき實驗である。諸君は然う思はぬであらうか。固より人が此實驗に到る

には色々の異りたる道筋を辿ることがある。即ち或者は恵を悟ることが早く、或者は遅く、或者は此方面よりし、或者は彼方面よりするといふ風に、其道行は多様であれど、つまり同じ救に到着するといふ一點は、互に一致して居るべき筈である。諸君は此救を我身に實驗して居るか、新しき心を得たりといふ自覺が胸にあるか。諸君に若し此靈の「証」がなければ、今直ちに求めて之を我が有とせねばならぬ。

第二、次に諸君は銘々、救はれて神の子となつたといふ「証」を有つべき者である。西洋で度々歌ふ軍歌の一節に「我が父は、家作も、土地も、多く所持し、世界の富を其手に握り給ふ。我が父の庫には金銀珠玉數限りなくありて、誰も値を知らず。我は王子の一人なり、我は王子の一人なり、我は救主耶穌と共に王子の一人なり。」といふ様な文句がある。而して之は正しく聖書の教と一致したる言葉である。

預言者イザヤは「視よ神は我救なり、我依り頼みて懼るゝ所なし、主エホバは我が力、わが歌なり」(賽十二〇三)といひ。使徒ヨハネは、「彼既に其靈を以て我等に賜ふ、これに由りて我等の彼に在り、彼の我等に在ることを知る」(約壹四〇十三)といひ。使徒パウロは又、其手紙の中に「聖靈自ら我等の靈と偕に我等が神の子たるを證す」(羅八〇十六)といふて居る。即ち以前に何時かといふのでなく、又は死んで天國に入つて後といふのもなく、現在此世ながらに我等が神の子たることを自ら知るといふは、如何にも榮譽あることではないか。諸君は此貴き實驗を有て居るであらうか。

若しさもなくば進んで聖靈の助けを受け、今日より眞に「我は神の子なり」との「證」を有する人とならねばならぬ。

第三、諸君は又今日、自分の生涯が神を喜ばして居るといふことを、自分で認めらるゝ筈である。即ち諸君は其心に思ひ、胸に感じ、身に行ふことが、悉く神を

喜ばして居るといふ自覺を以て、世を渡ることが出来るのである。

神は凡て諸君の身の上、行状をも、其心の内外の有様をも皆知り給ふ御方である。

「我いづこに往きて汝の聖靈を離れんや、我いづこに往きて汝の御前をのがれんや。我天に昇るとも汝かしこに在し、我わが榻を陰府に設くるとも、視よ汝かしこに在す。我あければの、翼をかりて海の極に住むとも、彼處にて尙汝の手我を導き、汝の右の手我を保ち給はん。暗黒は必らず我を掩ひ、我を圍める光は夜とならんと我いふとも、汝の御前には暗きものを隠すことなく、夜も晝の如く輝けり。汝には暗黒も光明と異なることなし。」(詩一三九〇七至十二)

神は斯く何んでも知りぬきたる御方にて、諸君の毎日の生活の内幕を知り、又其外観を知つて居給ふ。神は諸君の隠れたる所爲を知り、其家庭にて、勤先にて、小隊にて、又は集會にての言と行とを知り給ふ。一言にいへば神は諸君が日に夜に考へること、感ずること、爲すことを皆知りぬいて居給ふ。詩篇の作者が「か

九九

かる知識は不思議して我に過ぐ」(詩一三九〇六)といふたるは、如何にも最も千萬の事である。然るに諸君は此萬事見通しの神の前に、其豊かなる御恵によつて、いつも神を喜ばす生涯を送ることが出来るのである。

エノク神
に歩
めり

昔エノクは此の如き生涯を送つた人である。「信仰に由りてエノクは死なざる様に移されたり。神之を移し、によりて人見出すことを得ざりき。彼未だ移されざる先に神に悦ばるゝ者と證せられし也。」(來十一〇五)とは此事である。思ふにエノクは多数の家族より成立ちたる一種族の長として、彼等に對する重き責任を負ひ、又斯る人物の常として、様々の誘惑や困難は始終其身に附纏ふて居つたことかど考へる。それにも關らず、彼は信仰と、忍耐と、神の恩恵とにより、其靈魂に「我は神に喜ばるゝ生涯を送れり」との自覺を以て、世渡りをしたのである。

三箇の自
覺

借余は我等が此世に在る間から、第一、我は新に生れたりといふ事、第二、我は神の子なりといふ事、第三、我は神に喜ばるゝ生涯を營むといふ事、以上三つの

自覺を抱いて世を渡り得べきことを述べた。此「證」の不確實なる者は禍なる哉。かゝる人は眞正の幸福がなく、兎角悲觀に陥り、己が本分を盡す力を失ひ、随つて恐懼と臆病との捕虜とならねば止まぬものである。

それ故に諸君が若し、此貴き「證」を心に有つて居ないならば、速に求めて之を我が有とせねばならぬ。それとも若し幸に之を有つて居るとならば、油断なく保護して之を取失ふてはならぬ。假令全世界を得るとも、此貴き「證」を取失ふては何の益にも立ぬことである。

(一五) 光の中を歩む事

余は今約翰第壹書一章七節「若し神の光に在る如く光の中を歩かば、我等互に同心となるを得、且つ其子耶穌基督の血凡ての罪より我等を潔む」といふ一句に就て、諸君に語りたいと思ふ。之は短かい文字の中に多くの眞理を説きたるものである。殊に力ある聖潔の眞理を、巧みに短かい辭句の中に言現はしたるものである。

暗中の光

先づ考ふべきは「光の中を歩く」とは如何なる意味かといふことである。之は譬喩であるから今少しく其説明しをなさんに。諸君が若し圖らずも、一寸先きは闇みの森の中に迷ひ込んだと考へて御覽なされ。ごちらを見ても眞暗にて、猛獸は周圍に吼へ、毒蛇は足下にぬたくつて居り、而して前後左右には底の知れぬ陷阱が、幾つも口を開いて待つて居るとしたら何うであらう。諸君は一步も進み兼ね

神は光を照し給ふ

て當惑するに相違ない。かゝる時しも余が若し明るい提灯を携へて諸君に近づき、「さあ、私に随てお出なされ、私は行くべき途を知つて居る故更に恐れる所はない、屹度諸君を其目的地に案内するであらう」と、聲をかけることが出来たとしたら、何うであらう。諸君は大きに喜んで余の言ふなりに、其燈火の照す所に随ふて歩むであらう。

丁度其如く恩寵深き神は今諸君に向ひ「見よ汝等は其身體をも、精神をも、靈魂をも、家族をも、亦其境遇をも害ふ危険に満ちたる世界に住み、悪魔と姦惡なる世の人とは汝等を陥れんと待かまへ、死と沈淪とは又其足下を附けねらうて居る。若し一步をふみ誤れば汝等は絶望の谷底に落ちて、やがて永遠の禍に至らねばならぬものである。それにも關らず、汝等は自分の力一つでは安らかに其間を通り脱けることが出来ない。それ故余は今汝等を導き、何れの道を行けば、正義の人となり、有用の生涯を送り、末は天國に入り得べきかといふことを指示してやる

惟服従
る而已

第一、如
何に光を
與へ給ふ

一、良心

一〇四

のである。但し汝等は唯余が指示す途をのみ歩まねばならぬ、即ち導かる、儘に光の中を歩かねばならぬぞよ」と、かやうに仰せられて居るのである。

それ故「光の中を歩く」といふ意味は、神の聖旨を自分が知り得る限り、少しも加減せずに断す服従して行くことである。言ひ換ふれば諸君が苟くも自分の本分と心付きたることを、其儘實行することを謂ふのである。諸神の光に照さるゝといふことに就ては、色々考ふべき點がある。

第一、先づ大切なるは、其光といふのが、諸君自ら神より授けられたる光でなくてはならぬ事である。余が自分の務に就て如何に考へて居つても、それは諸君に關係ない。諸君は其自らに關する神の旨を、示さるゝが儘に履み行はねばならぬ。然らば神は如何にして其光を與へ、如何にして其聖旨を顯はし給ふであらうか。

(一) 神の光は諸君の良心を通して照される。即ち神は諸君の本心に物語り、其爲すべき務を示し給ふ。諸君は果して其良心の指示す通りを、素直に行ふて居る

二、聖靈

であらうか。

(二) 次に神の光は聖靈の嚮導に由て與へられる。約翰傳に「夫れ凡ての人を照す眞の光は世に來れり」(約一〇九)といふ語がある。神は諸君の心に聖靈を遣り、萬事に其聖旨を顯はし給ふ。諸君は平生聖靈の嚮導の儘に世渡をして居るであらうか。

三、聖書

(三) 神の光は又聖書に由て授けられる。諸君は聖書を読み又其教訓に従ふて居るか。若し然らば、これは光の中を歩くといふものである。

四、家族

(四) 神の光は時として信仰篤き母、祈禱する父、又は愛する兄弟姉妹、子女等を通じて、授けらるゝことがある。諸君は斯くして與へられたる光の中を歩いて居るであらうか。

五、聖徒

(五) 神の光は又屢々神に忠なる其僕の口を通して授けられる。小隊長、副官、戦友、遠い所に在る知己、近い所に住む友人、或は既に死んで天國に行きたる故

第二、光
果は如何
に歩む結
一、更に
光を與へ
らるゝ事

人を通して與へらるゝ如きことがある。

此の如く神の光は幾十幾百の異りたる方法に由て諸君に與へられる。唯問題は諸君が現在其神より授けられたる光の中を歩いて居るか、又其指示されたる職分を盡して居るかといふことである。而して若し此點さへ満足に履行せられて居るならば、神は此聖書の句にある如き、大なる功徳を諸君に施し給ふこと疑がない。

第二、然らば神の光の中を歩く結果は如何といふに、大畧次の如し。

(一) 光の中を歩く人には、もつと多量の光を授けられる。神の眞理を一層よく辨へたいと思ふ者は、今辨へて居るだけを実行することが大切である。救主の御言葉に「有てる者は與へられて尙餘りあり、有たぬものは有てるものをも取らるる也」とあり。與へられたる光の中を歩く者は、一層明かに神の道を悟る者となる。さり乍ら其與へられたる光の中を歩かぬ人は、其有つて居る光をさへも奪ひ去らるゝ者である。

二、神の
事となす

諸君の中或は、一向心靈上の事に暗い人のあるわけは、其知れ切つたる本分を怠り、又其有する特權を利用しないからではあるまいか。耶穌は又他の處にて、「我は世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩かず」と仰せられて居る。我等が若し太陽の光を追ふて、どこまでも歩くことが出来たならば、我等は年中暗黒といふものを知らぬ筈である。丁度其通りいつも基督の光に従ふて歩く者は、絶て「暗き中を歩かず、却つて一步一步大なる光に照らさるゝものである。

(二) 次に諸君が神の聖旨と心付いた程のことを行ひ、光の中を歩くならば、神は諸君をうけ納れて其子女となし、又自ら諸君の父となり給ふであらう。使徒ペテロの言葉に「我まことに神は偏らざる者にして、何れの國民にても神を敬ひて義を行ふ者は、其聖旨に適ふといふことを悟る」(徒十〇三四、三五)といふてある。即ち諸君が神の思召を分つた丈實行し、義しいと氣の付た丈のことを爲して、惡いと知つた丈のことを却け、與へられた程の光の中を歩くに於ては、神は喜んで

三、深め
らるゝ事

諸君の頸を抱き、諸君に目をかけて、其生る間、死ぬる時、限りなき來世迄も、
断す祝福を垂れ給ふに相違ない。

(三) 次に諸君が神の光の中を歩き、凡ての罪を棄て、聖旨のまにまに奉事の生涯を送り、其救と聖潔の恵とに靈魂を委ねて進むに於ては、諸君は耶穌の貴き血が、全く我等を潔むる力あることを眞實に味ひ得るであらう。

(四) 諸君は又神の光の中を歩くことに由て、進んで天の父と交り、其友たるの幸福を實驗することが出来る。即ち神と偕に歩み、神と偕に物語る、最も貴き特權を樂む者となるであらう。

偕、我軍人よ、諸君は今、神が與へ給ふたる光を如何に扱ふて居るであらうか。諸君は切角光を與へられながら、態と目をふさいで之を拒み、又は光に逆ふて歩いて居る如きことはないか。余は何卒然ういふことのない様切に望むものである。或は此文を讀む人々の中に、神から授けられたる光に逆らひ、之に従はなかつた

靈魂上の
浮浪人との
なる勿れ

爲め、今は其與へられたる光をさへも取返され、靈魂上の浮浪人となつて、心の中は暗く、信仰は墮落し、やがては絶望の谷底に落ちるより外なき有様に立至つて居る者はないか。若し一人でも然ういふ人があらば、來つて今一度「義の太陽」なる耶穌に立歸り、其暖かき恩恵の光に照されねばならぬ。然る後引續き光の中を歩き、益々神を知るの智識に進み、又日増に幸福有用の人となることが最も肝要である。今思ひ立つて、直ぐ其事を斷行なされ。

(二六) 祈禱論 (上)

余は近頃我が救世軍人の間に、もつと祈禱の精神が盛んにならねばならぬことを強く感じて居る。

余は我が救世軍人の間に多くの祈禱のあることを信じ、又實際に知つて居る。士官は祈り、兵士は祈り、少年兵は祈る。朝早く祈り、夜おそく祈り、日曜日に祈り、密室に祈り、公けの會合にて祈り。神を呼び求むる聲と、罪人の爲めにどりなす願事とは、斷ず救世軍人の間より天へとたち昇つて居る。とはいへ、我等はもつと祈らねばならぬ。今よりも、もつと度々、又もつと至誠をこめて神に祈るの必要がある。

救世軍には他にも多くの必要なものがある。もつと候補生志願者が入用である、もつと熱誠が入用である、もつと金銭が入用である、又もつと計畫工夫が入用で

祈禱の精神を盛んに

最も必要のもの

祈禱とは何

ある。さりとて、中にも最も切迫して必要なものは、今一層の祈禱であると謂はねばならぬ。

此祈禱さへ盛んに行はれたらば、其他に多く入用なる物は皆自ら與へらるゝであらう。オ、徧ねく我が救世軍人の上に、力ある祈禱の精神を以てバプテスマを施されんことを。

祈禱とは諸君が神に往き、耶穌基督の名に由て、何にても其入用のものを授けられんことを求むるの謂である。之は神が諸君に與へ給ふたる特權である。諸君は其事に就て耶穌の美はしき御言葉を記憶して居るであらう。「求めよ然らば與へられ、尋ねよ然らば遇ひ、門を叩けよ然らば開かるゝことを得ん。そは凡て求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者は開かるゝことを得べければ也」と。これ程單純な事が復と此世にあらうか。祈禱は如何にも容易にして、又誰にでも出来ることである。之は神が其大なる恩恵と憐憫とにより、諸君に入用のものを與へ

試練の時
の祈

給はんことを求むる迄の事である。
我等は此單純なる祈禱を、もつと銘々自分の爲めにせねばならぬ。凡ての兵士はもつと自分の爲めに神に祈るが可い。といふ意味は諸君が其日毎の務を行ふ上に、もつと神の助けを祈り求めよといふことである。諸君は多くの困難や試練に遭ふであらう。余はそれを知つて居る。己が健康上の試練あり、家族に關する試練あり、其知人朋友間の試練あり、其小隊に於ける試練あり、其他異種異様の試練がある。而して神は諸君が然ういふ試練に就き打開けて祈ることを望み給ふ。加之それが實際諸君の眞實の利益になる限りは、喜んで其祈禱を聽容れ給ふのである。試練は又斷間なく諸君に來るであらう。余も自分で然ういふ實驗を有つて居る。諸君は此んな小さな事にて神を煩はすのは、恐れ多いといふてはならぬ。神は一羽の雀をさへも聖旨にこめ、又諸君の頭の髮一筋だにも、故なくして地に墜つることを許し給はぬ御方である。随つて諸君の身に落ちかゝる難儀は何んな細かい

一羽の雀
を忘れぬ
神なり

體に行き
より先
づ神に行

事迄も皆知り給へば、諸君の方からも亦遠慮なく一切打あけて御相談申上げ、祈禱に由て其助を求めねばならぬ。
諸君は又其一身上の大事に就きて、誰に相談に行くより先に、神に行かねばならぬ。諸君は何か事があると、直ぐに其親戚、友人、又は醫者などに馳せつけて、神に相談するよりも前に、先づ彼等の忠告、助力を求めることがある。併し乍ら之は大なる心得違である。諸君は先づ神に行かねばならぬ。何事につけても一番先に神の導を求めねばならぬ。
諸君は又もつと其靈魂上の恩寵を神に求めねばならぬ。諸君は時として自分の心が如何にも冷たく、其愛が足らず、容易にわき路にふみ迷ひ、基督と又亡ぶる靈魂との爲めに盡すことの如何にも少ないのを、自分で感ずることがあらう。かゝる時には諸君は其胸の中に「若しも自分の感情がもつと柔和にして、其心に活火が燃え、又罪人を動かす様な言葉を語ることが出來たならば、どんなに幸福であ

靈魂上の
恩寵

他人の爲に祈るに似たるに似たり

らうか」と考へるに相違ない。ア、それこそ諸君が大に神に祈るべきの時である。神が諸君を助け給はんことを祈れ。神に向ひて諸君が如何に感じ又何を求め居るかを打開けて告げよ。而して求めに従ひて入用の物を與へるとの御約束を小楯に、今直ちに然かなし給はんことを祈らねばならぬ。それと同時に今一層他人の爲めに祈ることが大切である。他人の爲めに祈ることは、最も高貴にして且つ基督に似たる行である。我等は世の人の罪と重荷を我身に負ひ、之を神の前にとりなす様でなくてはならぬ。諸君が祈禱を以て助けべき人々は諸君の身邊に満ち、或は其家族の中にさへも見出さるゝであらう。されば我軍人よ、祈れ、祈れ、祈れ。余は救世軍の參謀及び戦場の士官に對ひて祈れと要める。併し乍ら今は殊に我下士官、兵士に對ふて、一層熱心をこめて祈禱すべき事を要求して居るのである。今尙それに就て少しく實際上の忠告を試みたいと思ふ。

第一、密室の祈

第一、諸君はもつと密室の祈禱を勤めねばならぬ。固より諸君は密室の祈禱をなす人々である。折々人を避けて自分の部屋か、又はどこぞ静かなる場所にて、神の外誰も見ず又聞かざる所に、其心の誠を注ぎ出して、自からの爲め、隣人の爲め、又は救世軍の爲めに祈禱して居るであらう。さり乍ら諸君はもつと此大切な務に其眞實をこめねばならぬ。一層熱心に密室にて神を呼び、之に訴へ、又之に祈り求むることを心がけねばならぬ。

第二、家族の祈

第二、諸君はもつと家族の祈禱を重んじねばならぬ。勿論諸君の中には、家庭にて一緒に寄つて祈禱することが六かしく、或は全く出来難いものもあらう。併し乍ら事情の許す限りは、是非此家族の祈禱を勤めねばならぬ。オ、一家の主人たり主婦たる者よ、諸君は自らの爲め、又其子女等の爲めに、一緒に寄つて祈禱せよ。又凡て同じ屋根の下に住む人々をも呼びつぎへて、一緒に神を禮拜せねばならぬ。

第三、諸君は又今一層熱心に其會館にて祈禱せねばならぬ。余が恐るゝ所は我が軍人の中に、公けの會合にて殆んど全く神に祈らず、或は絶て祈禱せぬ者がありはせぬかといふことである。之は何人の過失であるか。實に其軍人自らの過失といふの外はない。或は其事に就き彼是れ申譯する者があるとも、それは徒然なる事である。唯大切なるは諸君が一切然る口實を棄て、今後際會すべき最初の機會を捉へて、直ちに其目の前に徘徊する罪人の救の爲めに熱誠をこめて祈禱することである。

余は集會の席にて、折々我が前後左右に在る制服を着けたる救世軍人を顧みて心に思ふことがある。「ア、唯此人々さへ神に祈り、眞實を注いで祈禱の中に神と角力するに於ては、如何に大なる奇跡も直ちに此場に行はるゝであらうに」といふれば我が軍人よ、目をさまし、自からの爲め、其小隊の爲め、又亡ぶる世の救の爲めに、思ひ込んだる祈禱をなし、神と角力する者たらんことを覺悟せよ。

諸君は野戦にて、もつと熱心こめたる祈禱をせねばならぬ。野外に跪つき、熱誠を注いで祈禱する者のある時、心なき亂暴人さへ自ら恥ぢ、其罵詈雑言を差控へる如き事は、余が度々経験して知つて居る處である。諸君の中或は野戦にて證言の出來ぬ人があるかも知らぬ。併し乍ら屹度目を閉ぢて祈禱することは出來るであらう。往て之を事實の上に試みよ。神は必ず諸君に聴き、其求むる恩恵を與へ給ふに相違ない。

諸君は又人の家を尋ねた時、去る時、食事の時、又は日中の十二時三十分、其他浪車でも、野原でも、勤先でも、到る處もつと熱心に神に祈ることを努めねばならぬ。

諸君は又もつと「手裏劍的の祈禱」をつとめたが宜しい。即ち其時々必要に應じ、唯一言づゝ「主よ我を助け給へ」とか、「主よ聖靈を注ぎ給へ」とか、「神よめぐみ給へ」とか、又は「主よ罪人を救ひ給へ」といふ如き短き祈禱をすることが

二一六
 大切である。之は靈魂上の投鎗、又は手裏劍とも呼ぶべきものにて、眞直に飛んで神の御座に迫り、其大御心を動かし、其祝福を得來る力のあるものである。諸君は又もつも「心中の祈禱」をつとめねばならぬ。之は人の靈魂が靜かに神の靈と交はり、神に就て思を潛め、入用なる力を俟望み、又無くてならぬ智慧を尋ね求むることである。使徒パウロが「斷ず祈るべし」といふたるは、斷間なく此種の祈念をこむべきことを謂ふたるものである。軍人よ、諸君は今から、もつと神に祈ることを努めるであらうか。諸君の心が今どんなに固く、又冷たいからといふて、心配するには及ばぬ。唯此後眞に祈禱の人とならんことを覺悟し、今から直ちに之に着手なされ。神は諸君の祈禱に應へ、必らず尋常ならぬ不思議を現はし給ふであらう。時は今である。直ちに祈禱の人となりて、其大なる力を事實の上に經驗する者となれ。

(二七) 祈禱論 (下)

聖書には祈禱を最も大切なること、教へてある。即ち祈禱に由て勝利を得、救を施し、又は奇跡を行ひたるなど、多くの目ざましき物語は、聖書に滿て居る。今其二三の例を擧ぐれば、ヤコブが神と角力したる時エサウの心は和らぎ、モーセが神を呼びたる時紅海の水は二つに分れた。ヨシユアが祈る時にアカンの惡事は發かれ、ハンナが祈る時にサムエルは其家に生れ、ダビデが祈禱すればアヒトベルは自ら終れ、ヒゼキヤ王が祈禱すればアツスリア人は塵しにせられ、ダニエルが只管神を拜む時猛き獅子は其口をつぐみ、エリヤが天に叫ぶ時大夕立は沛然として降り注ぎ、使徒達の篤き祈禱の應驗としては又ペンテコスタの聖靈の降臨を見たのである。

祈禱は又聖書の約束を實際に應へらるゝ爲めの條件である故諸君は神に祈らねば

ならぬ。例へば救世軍人の間に度々引用せらるる、聖句にて、「我清き水を汝等に濯ぎて汝等を清くならしめ、汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清むべし。我新しき心を汝等に賜ひ、新らしき靈魂を汝等の衷に賦け、汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝等に與へ、吾靈を汝等の衷に置き、汝等をして我が法度を歩ましめ、吾律法を守りて之を行はしむべし。」(結三六〇二五至二七)といふ御約束を實際に行はれたいとならば。進んで「主エホバかく言ひ給ふ、イスラエルの家、我がこれを彼等のために爲さんことを亦我に求むべき也。」(結三六〇三七)といふ祈禱の必要を認める次第である。

主耶穌が如何許り祈禱に重きを置き給ふたかといふことに就ては、「凡そ祈禱の時、其願ふ所のものは必ず得べしと信せば必ず得べし。」(可十一〇三四)と仰せられたる如き言葉に由て見るとも、大概之を察することが出来る。

耶穌は斯く言葉に由て祈禱を勧誘するのみならず、亦身を以て祈禱の人の鑑となり給ふた。即ち或時は山にて、或時は野にて、或時は園にて、耶穌は我等の爲めに神に祈り給ふたのである。諸君は其模範に倣ふであらうか。若し諸君が能く耶穌の如く祈禱する人となるに於ては、神は必ず諸君を愛し、又諸君を祝福し給ふに相違ない。

第一、諸君は自分自らの上に、今一層神の不思議なる方の現はれん爲めに祈禱せねばならぬ。諸君は今日迄に神より受けたる祝福を懐い出ねばならぬ。諸君は嘗て悔改めて罪の赦を求めたる時、神が如何に快く之を聞き容れて救を與へ給ふたかを記憶するであらう。我は殆んど見込なき罪人であつたが、恩寵の座に出て祈る時、神は我が願を聞きいれて自由の人とならせ給ふた」とは、正しく諸君の實際であつたことと思ふ。

諸君は又其以來幾度か、さまざまの難儀苦勞の中より神に呼び求め、其祈禱の聴かれたといふ實驗があらう。而して其結果は詩篇の作者と共に「此苦しむ者叫び

たればエホバ之を聴き、其凡ての患難より救ひ出だし給へり」(詩三四〇六)と、告白することが出来るではないか。

諸君は又嘗て自分、又は自分の家族の病み煩へる時、神に祈り求め、神は其痛みを除き、其苦みを去りて、之に健康を恢復せしめ給ふたことがあらう。神は此ういふ場合にも諸君の祈禱に應へ給ふ御方である。諸君は又屢々信仰より墮落せぬ様神に祈り求め、其應驗として今日斯くして居ることが出来るのである。世俗は諸君を引戻さんことを努め、肉の慾は斷ず諸君を誘ひ、惡魔は又罪を設けて始終諸君を陥れんと待構へて居る。それにも關らず「主は愛を以て携へ出だし、引續き助を與へて其生命を守り給ふ」が故に、諸君は幸に今日あることを得たのである。

今と雖も諸君の行手に天國のある如く、其背後には依然として地獄が横はつた居るのである。それ故に祈れ、根氣好く祈れ、斷ず祈れ。唯祈禱のみ諸君をして斯

前には天
地獄

かる中にも能く其靈の命を保ち、勝利を得せしむるものである。即ち「祈禱は基督信者の生命の息にて、又其呼吸する空氣、死の門をくゞる時の合言、又天國に入るの道なり」とは、此事をいふたるものである。

第二、諸君は又其小隊の上に、今一層神の不思議なる力の現はれん爲めに祈禱せねばならぬ。こゝに其事に就て一つの事實談がある。少しく以前一人の樂長が參謀總長の特別集會に出席し、段々講話を聴聞するうち、我が小隊の現狀に就て非常に不安を感じ初めた。そこで小隊に歸ると直ぐに、祈禱の力に由て之が解決を試みたいと決心し、乃ち其樂隊員を呼び集め、自分の心の中を述べて、共に毎晩一緒に小隊の爲めに祈ることを約束した。かくて彼等は毎晩一つ所に出會ひ、各々自ら省みて其罪を懺悔し、其戦争の現狀と、又町民の不信仰の有様とに就て神に訴へ、地獄に落ちゆく靈魂の爲めに涙の祈をさゝぐるこゝとなつた。一週間も漸く過ぎて土曜の夜に及び、一同の心は神の恵の中に銘ぐるが如くなり、屹度其

第三、不信なる者に救を求め

第四、世の爲めに祈れ

地にリバイバル起るべしとの信仰を得るに至つた。而して翌日の日曜よりは全小隊振ひ動き、救を求むる靈魂も多く現はれ、軍人の數は數週の間二倍に増加したのである。オ、諸君は亦銘々其屬する小隊の爲めに、もつと熱誠なる祈禱をささげねばならぬ。

第三、諸君は又其家庭に在る未信者の上に、神の不思議なる力の現はれん爲め祈禱せねばならぬ。其妻の爲め、夫の爲め、両親の爲め、子女の爲め、主人の爲め、主婦の爲め、又奉公人の爲めに、救の力を呼び求めねばならぬ。諸君は又其感化の下に在る人々の爲め、毎日其名前をよみ上げて神に祈る様でなくてはならぬ。オ、祈れ、祈れ、祈れ。

第四、諸君は又其身を寄する現在の社會に、多くの悪人あり、神を知らざる人々のあることを憶えて、彼等の爲めに神に祈らねばならぬ。我等が此世の有様を見渡す時、眞に心を傷ましむがことが多い。酒に溺るゝものあり、放蕩に耽けるもの

あり、人を欺くものあり、不義を行ふ者あり、犯罪人はあちらこちらに出没し、墮落信者は行く先々にうろづいて居る。不信仰の風は盛んに吹きすすんで、宗教を侮り輕しむる者の數は甚だ多い。此儘に棄て置たならば、世の人は手に手をどつて蕪地に地獄の滅亡に墮ち行く外はないのである。

之をどうしたら可であらうか。我々救世軍人は之が爲めに何事をかなし居るには相違ない。我等は世の人の罪を警しめ、其爲めに説き、其爲めに歌ひ、又其爲めに手を差し伸べて、彼等を救主に導かんことを努めて居る。併し乍ら尙其上に附け加へて、我等は祈禱する團體でなくてはならぬ。即ち夜、晝、到る處に、我等は神が天を裂て降り給はんことを祈らねばならぬ。神が罪の大山を打碎き、救を遍ねく世に施し給はんことを願ひ求めねばならぬ。オ、我等をして祈らしめよ。我等は幸にして皆祈禱することが出来る。之は最も大なる特權である。祈禱するには、地位も、教育も、才能も、何も要らない。誰でも自由に神の御座に近づき、

救世軍をして祈禱する團體たる

大なる父に物申上げることが出来る。此特権を用ゆるに就ては何人と雖も更に異なる所はない。

力ある祈の條件

力ある祈の條件は凡そ三つある。其一、眞實、其二、信仰、其三、忍耐、唯これ丈である。而して之は如何なる救世軍の兵士にも皆實行し得べきことである。余は今それに就て一つの物語を致したいと思ふ。

祈禱する女中

或紳士の屋敷に多くの奉公人を使ふて居つたが、其中に一人の救世軍兵士が入り込んで参つた。女中頭は高ぶつて自ら義とする婦人にて、一向宗教のことを知らず、殊に救世軍が大嫌ひであつた。此度雇ひ入れたる少女が救世軍兵士であること聞た時には大層不機嫌にて、飛んだものを連れて来たと言はぬ許りの顔色であつた。其以來何か用事のある時にも自分では曾て一言も其少女と口を利かず、必ずす他の女中を通じて之を命するといふ有様。どこ迄も輕蔑の態度を以て之を扱ふて居つたのである。然るに或夜女中頭が既に臥床に入りたる後、一人の女中は其

中夜の呻き聲は何

室の戸を叩き、而して言ふには「只今彼の救世軍兵士の室にて、何か呻く様な、泣く様な、氣味の悪い聲が聞へます。私共は先刻から何んだらうかと尋ね合ふて居りますれども、薄氣味が悪くて誰も能う行つて見ませぬ。何卒あなたに一寸御立會を願ひ度ござりまする」とのことである。「そんなことに頓着せずとお癢みなさい、何のことがあるのですか」と、女中頭は返答をして之を返したが、間もなく先の女中は復ぞろやつて来た。而して言ふには「誠に相済みませぬけれども、どうも皆んな氣味が悪くて困つて居りますから、御迷惑ながら一應御取調べを願ひまする」とのことである。そこで女中頭は面倒とは思へども、若しそんな話が、御主人の耳にでも入つたら大變であると、女中を一先づ其室に歸らせて置き、獨りで竊に彼の救世軍兵士の室に近づき、立聞きをするとも知らず、中では冷や一生懸命涙を流しながら神に訴へて居る所である。「神様よ、どうか私の罪を赦し給へ。私は此家に来て最早三ヶ月になりますに、未だ一回だも女中頭

是れ神さなり角力する

頑固なる
心は砕ける

此力を以て
世の救済
の爲めに
盡せ

様に、其靈魂の救のことを御注意申上げることが出来ませぬ。オ、主よ女中頭様を救ひ給へ。私の怠り故にあのお方が滅亡に行かれることのない様、主よ彼お方を恵み給へ。私には又何卒思切つて、せめて唯一言なりとも、其靈魂のことに就き御注意申上げらるゝ様其力を與へ給へ」と。少女はすゝり泣きをしながら、必死に祈つて居る所である。之を聞いた女中頭はたまり兼ね、いきなり戸を開けておどり入り、少女の頭を擁きたる儘泣き倒れ、自分のこれ迄の邪見を詫びて、その場にて耶穌の救を呼び求むることゝなつた。之は其少女に取つて、何んとも言ひ様のない嬉しい出来事であつたと共に、女中頭に取つては亦一生忘るべからざる事柄であつた。而して殊に面白きは、其女中頭が今は救世軍の一士官となつて救の軍を戦ふて居ることである。されば祈れ、祈れ、祈れ。諸君は皆此力ある祈禱をなし得るのである。往て祈禱の力に由て世界の救の爲めに盡せ。

(二八) 聖書論 (上)

余は今少しく聖書に就て諸君に語りたと思ふ。諸君は皆聖書が非常に大切な書物であることを知るが故に、随つて亦之を珍重して居ることゝ思ふ。殊に余は近頃救世軍人が一般に聖書を愛読する風の盛んになつたのを見て、大に喜んで居る。とはいへ今分の處にては、まだ此貴き書物が當然受くべき丈の尊敬を受けて居ない恐れがある。それ故余はこゝに聖書の價值を一層感する爲め、其助けともなるべき點數ヶ條を語りたと思ふ。

聖書は實に世にも不思議なる書物である。英語にて聖書のことを「バイブル」といふ。其意味は「書物」若くは「唯一の書物」といふことである。而して聖書は實に名詮自稱、他に較ぶべきものなき唯一無二の經典である。それ故我等は他の如何なる書物にも急りて之を珍重し、其教ふる所に従はねばならぬ。現に或賢き

世にも不
思議なる
書物

人は、若し世界の他の有ゆる書物と一卷の聖書と、何れか一つを擇まねばならぬ場合があるとすれば、自分は喜んで聖書を取るであらうといふ様な例もあることである。

第一、然らば聖書は何故、我等に取つて左程に貴重なる書物であるか。其理由は次の如し。

(一) 聖書の著者は神である。之は神の特別なる指導の下に著はされたる書物である。即ち聖霊は思想を古への聖人に授け給ひ、彼等はそれを書き留めたのである。それ故聖書のことを「神の語」とは呼ぶのである。

(二) 次に聖書は神の事を我等に教へる故、最も貴重なる書物である。此世に若し神があるとすれば、我等は其神に就て何事をか知らずしては満足せられぬ筈にて。神の側面からは亦其方と、愛と、人間に對する思召とを、我等に現はさずしては安んじ給はぬ筈である。而して此二重の要求を解決したるものが、即ち一卷

第一、聖書の貴重すべき理由

其著者は神なり

神を教ふ

耶穌を教ふ

來世を教ふ

血沙の功徳を教ふ

の聖書である。聖書は神を我等に顯すが故に、此上もなく大切なる書物である。

(三) 聖書は又我等の主にして、又救主なる耶穌基督の降誕と、生涯と、受難と、十字架の死と、さては其復活と昇天等のことを知らしむる故、最も貴重なる書物である。聖書以外の當時の歴史には、ほんの僅かしか基督に關する記事がない。さり乍ら我等は聖書の中に、基督御在世の有様、其不思議なる御わざ、又其世にも有難き御教訓等を見出すことが出来る。これは如何にも忝けないことである。

(四) 我等は又聖書に由て來世の確實なることを教へられる。若しさもなければ我等は死んだ先が如何に成行くものやら、一向之を知るに道がない。さり乍ら唯聖書あるが爲めに、我等は死たる者の復活、大なる審判、幸福なる天國、又悲惨なる地獄等の事を知るのである。若し聖書がなかつたならば、我等は此等の大事な事柄を、全く知らずに終らねばならなかつたであらう。

(五) 次に聖書は又、我等に有難き救主の血沙の功徳を教ふるものである。我等

世界を感
化せり

反對迫害
を凌ぎ來
る

悪人の敵
善人の友

聖書と各
節人

は之に由て罪の赦さるゝこと、心の深めらるゝ事、神の守護、又勝利の死等の事を諒解することが出来る。若し聖書がなかつたならば、我等は此等の事の實際に出来るか、否やを、十分に知る道がなかつたであらう。

(六) 聖書は又過去の世界に極めて大なる感化を及ぼした書物である。聖書の教によりて幾百千萬の人の心は變化せられ、其生涯は聖別せられ、數限りなき多くの靈魂は恐ろしき滅亡を免れて「千代經し巖」の上に立たせられ、彼等の口は讚美に溢れ、其足は地獄の門に近づく代りに、却つて天國の衢を歩くことゝはなつたのである。

(七) 聖書は又世界に存在する有ゆる書物の中最も劇しき迫害と侮辱とを経來りたるものである。人々は幾度か聖書を此世より絶やさんものと其力の限りを盡した。然るに聖書は却つて凡ての反對障礙に打勝ち、其結果終に世界各國の人民に愛讀せらるゝものとなつた。此世と地獄とに屬ける一切の権力は、終に聖書を奈

何ともすることが出来なかつたのである。

(八) 聖書は又、悪人に忌まれ、善人に重んぜらるゝ書物であるから、之を大事に扱はねばならぬ。世の悪人原は聖書を忌み、之に何とかいふ悪名を負はせた上、成らうことなら世から取去りたいものと努めて居る。けれ共善人は其正反對に聖書を愛好し、之を熟讀して其世渡の手引となし、之を世の中に廣め、又斷ず斯かる書物を人間に賜はりたる神に感謝して居るのである。

(九) 聖書の眞理は又、現に諸君の身の上の多くに不思議を現はして居ること、思ふ。若し聖書の教へがなくなれば、諸君は今時分何うなつて居つたであらうか。恐らく諸君の中或者は、早くも墓に葬られ、其靈魂は暗黒に逐ひやられて居つたであらう。又他の多くのものは、今現に其方向に對ふて進行中であつたかと思像される。それを想へば聖書は如何にも勿體ない書物ではないか。聖書は實に諸君に取つて此上もなく貴き書物である。

第二、之
を如何に
扱ふべき

熟讀玩味
すべし

單獨にて
讀め

家族と共に
讀め

之を實驗
せよ

之に服従
せよ

第二、果して然らば、諸君は斯く迄貴重なる聖書を如何に扱ふべき筈であるか。之を何の思慮もなく粗略に扱ふても可であらうか、之を古新聞、小説、稗史、其他別段役にも立ぬ書物と一緒に見做して可であらうか。決してくさういふ道理はない。聖書を倉末に扱ふのは此世の輕薄にして神を知らざる人々の事である。諸君は固より然ういふ人々の眞似をしてはならぬ。然らば如何にすべきか。聞け、余は今その事に就て諸君の注意を促がすであらう。

(一) 諸君が先づ、此貴重なる書物に對して爲すべきことは、謹んで之を讀むことである。例へば余が若し諸君の或者に手紙を贈るならば、之を受取つた人は、大將からの手紙だといふので、必ず之を讀み、其意味を考へ、又其所望する所を満足せしめんことを努むるに相違ない。今聖書は天の父上より諸君に賜はりたるお手紙である。然るを諸君は其大將の手紙に對するよりも、倉末に扱ふ如きことがあつて相済むと思ふか。諸君は常に聖書を熟讀せねばならぬ。

(二) 自分一人にて讀め。一度に唯數節でも之を己が密室にて讀め。又は電車、流車の中にて讀め。寸暇を見出して屢々之を讀め。

(三) 其家族と共に讀め。殊に人の親たる者は其子等に聖書の貴き眞理を教へん爲め、家庭にて之を讀まねばならぬ。分らぬ所は説き明し、時を定めて之を讀み、其家族をして、一通り聖書の記事に通曉することを得せしめよ。

(四) 又自ら省みて、聖書に示されたる恩恵を、果して我が身に實驗して居るか、否やと問ひ試みねばならぬ。徒らに聖書の語を讀んで其精神を會得せざるものは眞に禍である。又聖書を頭にのみ知りて其恩恵を心に受けず、即ち血汐の泉に洗はるゝこともせず、進んで聖書を戴き、福音の光と喜との中に生き死する生涯にも入らざる者は、眞に禍なる人である。

(五) 聖書が命令する所の職分を行へ。唯之を實行する者のみ、眞に神の祝福にあづかるべき者である。聖書を其家庭、社會、小隊、其他凡ての所に於ける惟一

其福音を
宣傳へよ

の手引とせねばならぬ。

(六) 聖書が教ふる所の救を、諸君の行く先々に宣べ傳へよ。町の辻にも會館にも、家庭にも、勤め先にも、到る處此書の福音を告げ知らせよ。

我軍人よ、諸君が若し聖書を倉末にして讀まず、或は之を讀んで其救と勝利とに關する教を學び乍らも、進んで之を實驗しない様なことがあらば、彼の大なる審判の日に、聖書は却つて諸君の有罪の宣告を資くる、有力なる證據物件となる如きことがないとは限らない。さういふ不幸なことの無い爲め、今から前以て大に警戒する所がなくてはならぬ。

有罪の證
據物件

(一九) 聖書論 (下)

歴史上の
大事件と
聖書

聖書の普
及を助く
べし

聖書は今日迄此世の中に多くの驚くべき感化を及ぼした書物である。人間の歴史に最も大なる出来事は殆んど皆聖書と密接なる關係があつた如く見える。此の如き書物を我がものとして讀み得るは、如何にも大なる特權と謂はねばならぬ。

我等は一層手廣く此聖書を世に普及することに よりて、大なる善事を行ふことが出来る。此廣い世界のどこに行つても、聖書を善へぬ家はない様にしたいたいものである。又聖書の大切なる教訓と誠命とを辨へぬ人はない様にしたいたいものである。若しどこかに聖書の爲めに多分の金を費いたたいといふ富豪があり、余に忠告を求めたとするならば。余は其人に、差當り文明國の家といふ家には必らず一巻の聖書を備へさせ、又それに添へて聖書の眞理を誰にも分る様説き明したる一巻の書籍を備へさせたいと思ふのである。ともあれ、我等はもつと聖書を世に廣むることを

を務めねばならぬ。

それと同時に、尙それよりも愈りて大切なるは、我等が聖書の語を身に行ひ、活きた聖書となりて其眞理を世に廣むることである。我等は平生其心に神を宿さねばならぬことを唱へて居る。其通り我等は又其心に聖書の眞理を宿す者とならねばならぬ。約翰傳第一章に「道肉體となりて我等の間に宿れり」とあり。即ち「神の道」なる基督が人の姿をとつて此世に現はれ給ふたといふ意である。基督は神の聖旨と感情とを人間に現はす爲め、人の姿をとりて此世に降り、人と交はり、人と語り、人の爲めに盡し、苦み、果は其命を棄て給ふた。其如く救世軍人は又、聖書にある神の道を其儘心に宿す者となりて、此世の中に立ねばならぬ。即ち男子も、婦人も、小兒迄も、聖書の教を其通り行ふて、活きた聖書の圖解となり、周圍の人々に感化を及ぼす様でなくてはならぬ。我等は自ら善良にして慈愛を旨とする人物となり、神の愛と憐憫とを世の人に示

さねばならぬ。我等は惡を賤しんで之を足の下にふみにじることにより、罪の憎むべきことを世の人に教へねばならぬ。我等は正直、勉強、深切、純潔の生涯を送ることに由りて、聖潔の慕はしきことを世の人に證しせねばならぬ。我等は喪はれたる者は憐み、亡ぶる靈魂を憂へて、之を救に導くことにより、耶穌基督の犠牲と其愛とを世の人に傳へねばならぬ。我等は又喜び勇んで神に奉事をなすことにより、勝利の宗教を世の人に紹介せねばならぬ。

かく言へば諸君の中或は「なぜ我等はそんな風に、活きた聖書となつて世に立つ必要があるか」と尋ねる人があるかも知れない。それに對して余が答へることは是である。世間の人は聖書の有難き教を知らず、隨て神の事に就て無智で、又多くの間違つた思想を有つて居る。或者は神を無理なる主人の如く思ひ、或者は神をどう扱ふても差支へなき無感覺なる御方の如く考へて居る。彼等は又神が彼等に對して有ち給ふ目的、希望を知らず、神が彼等に對ひ、如何なる人となりて如

故意に聖書を讀まざる者あり

一〇
何なる事をなさんことを要め給ふか、或は其爲めに如何なる方を授け給ふかといふことを知す、自分の罪と其頼りなき有様に對し、宗教がどれ程の功德のあるものかといふことを全く辨へない。彼等は宗教とさへいへば、唯もう陰氣で、悶陶しくて、並大低の人にはやり切れぬことを註文するものゝ如くに心得て居る。然るに聖書には、此等凡ての事に就て明白に教へてあり、人々が唯之を手にとつて讀みさへすれば、直ぐに合點の出来る様に書き記してある。それにも關らず、或人々は文字を知らない爲めに、之を讀むことが出来ない。此ういふ人は眞に氣の毒の至りである。然るに他の多くの人は、文字は讀めるけれども聖書を讀まない。彼等は聖書を侮つて、之を讀む甲斐なしとし、其教を心にさめる價値なきものゝ如く扱ふて居る。彼等は己が營業の事や、娛樂や、罪の行の爲めに心くらみ、聖書を細く心なく、又聖書にもとづいて教をなす所の集會に近くことをしない。彼等は聖書を

彼等は諸君を讀む

家庭に於て

所有して居るであらう、併し乍ら會て手にとつて之を讀むことをしないもの共である。さり乍ら此の如き人々と雖も活きたる聖書は之を讀むのである。即ち聖書の教を其まゝ實行する者の言と行とは、之を注意して讀むのである。彼等は諸君を讀むであらう。又諸君を讀まずには置かぬであらう。それ故諸君は聖書を其胸にたくはへ、之を身に行ひ、所謂活きた聖書となつて世に立たねばならぬ。第一、それに就て常に心に銘めて忘れてならぬことは。(一) 諸君の言と行とが、先づ以て其家庭の内にて讀まるゝことである。即ち妻は夫の行を讀み、其心の中迄推し量つて其眞似をする。多い中には多少の例外もあれど、概して言へば、眞の救世軍人を夫とする妻は其感化を受けて、餘り道に外れた世渡はせぬのが常の事である。夫も同じく其妻の言と行とを讀むものにて、子女等は亦固より其父母又は兄弟の行狀を讀まずには居らぬものである。

勳先に於

(二) 諸君は又勤め先にて、朋輩から其言と行とを讀まるゝものである。かゝる場合に彼等が諸君の事を何んと思ふて居るかは一々分り難いけれ共、概して言へば、彼等が案外實際を穿つた品性上の鑑定をすること丈は、確實であると謂ふことが出来る。

小隊に於

(三) 諸君は又其小隊にて人々から讀まるゝものである。而して其際諸君が眞に救世軍人に耻かしからぬ言語舉動を演ずることは、他の千言萬語を費して兵士の義務を説明し、又は證言するにも愈つて善良なる結果を見るものである。

隨處に於

(四) 諸君は又街頭にも、路旁にも、到る處人々から其生涯を讀まるゝものである。殊に諸君が制服を着用して外出するに於ては尙更然うである。而して諸君が若し實際に神の僕に相應しき世渡をしてさへ居れば、諸君は百卷の新約全書を配布したるにも愈りて、活ける基督を世の人に紹介することが出来るであらう。彼等は聖書を讀まずとも、諸君の品性行狀には目をこめざるを得ないのである。

第二、如何に眞理の活潑たるべきか

第二、されば我が軍人よ、諸君は身を以て活ける聖書となり、又は其眞理の活ける圖解となつて、周囲の人々を教へ導かねばならぬ。それに就て是非共注意すべし。

(一) 諸君が實際に善人となつて居るべきことがある。諸君は聖書の教訓と誠命とを、毎日の生涯に實行する人となつて居らねばならぬ。

(二) 諸君は又其身を以て、實際的宗教の活ける圖解たらしめねばならぬ。即ち諸君は聖書に約束してある、罪の赦、新に生まるゝ事、聖潔、安心等を、十分其心に樂むで居らねばならぬ。

(三) 諸君は、又聖書に命じてある通り、靈魂を愛する精神を得、世の救の爲めに生る者の鑑とならねばならぬ。此精神目的なき者が、如何にして耶穌基督の僕たることが出来よう。余はそれが到底不可能事だと信するものである。

(四) 最後に今一つ大切なるは、諸君が聖書を文字通りに行ふ許りでなく、却つ

聖書の精神を得

一四四
て其精神と力とを我が有とすることである。かくてこそ諸君は盜るゝの自由と、光明とを、周囲の人々に領つことが出来るであらう。

(三〇) 基督を證する事 (上)

耶穌を愛する者の唇から出づる言語を、意外の時、意外の所にて聞き、それが本にて救を受くるに至りたる例は至つて多いことである。天國には亦然ういふ人の入込んで来る數が、日増に増して居ることかと考へられる。

されば我等が若し有ゆる機會を捉へて、有用の奉事をし様と思ふならば、幾許でも然ういふ折がある。併し乍ら多くの場合には、切角の好機會も無頓着に扱はれ、無用に歸して居るのである。余は諸君が此事に心付、以來は及ぶ丈、凡ての好機會を捉へて、之を利用する人とならんことを要めるのである。

殊に諸君が若し救世軍の制服、徽章等を着用し、公けに自分が神の軍人たることを發表して居るに於ては、世の人は諸君が彼等の靈魂上に警告を興ふべきことを待望して居り、自然善を行ふの機會も一段と多いことである。

善を爲すの機會多し

制服着用の益

諸君を
恐らるゝ
恐らるゝ

かゝる場合に諸君が若し其當然の務を怠り、彼等の靈魂の爲めに盡す所がないならば、それは彼等に一種物足りない感じを起さしむるは勿論、時としては諸君のことを、其説く所の眞理に忠實ならざる偽善者の如く、見做さしむることさへあるものである。

諸君は固より其家族と打とけて物語る時、靈魂上の大事を語り出づることがあらう。それは至つて結構である。さり乍ら余は今其事をいふて居るのでない。諸君は又救世軍人同志出會ふた節、屢々信仰上の物語をするであらう。之は甚だ大切なことである。さり乍ら余は今其事をいふて居るのでもない。一體战友互に相會し、心靈的の話をなし、又は宗教上の實驗を語り合ふことは、互の勵みともなり、又助けともなるものである。それ故余も亦過る六十餘年の救の軍の實驗上より、此様な文を認めて諸君に贈つて居るのである。けれ共余が今こゝに、基督を證する必要を説いて居るのは、战友お互の間に就ての話ではない。

機會を捉
へて基督
を證すべ
し

之を練習
すべし

余は今諸君が其周圍に在る、神を知らざる世の人と話をする時、機會を取失はぬ様、唯一言でも救の事を語る様に、其事をいふて居るのである。さりさて余は今あながち諸君が罪人を其家庭に、病床に、居酒屋に、工場に、訪問して行けど勤めて居るのではない。此等は固より大切のことである、非常に大切の事である。さり乍ら余が今こゝにいふて居るのは、諸君が平生圖らずも汽車や、電車などに、乗合になつた人々に、一言若くは數言の勧めをする様なことを促がして居るのである。或は品物を賣り買ひする時、水車にて勞働する時、道を歩く時、其他の場合に、偶然出會ふた人々に對し、常に心がけて、一言でも救の事を語る様にし度といふて居るのである。

諸君の中、或は「私にはとても然ういふことは出来ませぬ、これ迄やつたことがありませぬ、とてもやる氣になりませぬ」といふ者があるかも知れない。併し乍ら暫く待て、余は今此の如き結構なる働が、暫に諸君に爲し得べきのみなら

第一、最初に對面したる人に

第二、機會を捉ふる事

す、亦樂んで爲し得べき筋道を説き明し度と思ふのである。それに就て余が諸君に勸告したきことは。

第一、今から外に出たる時、最初に出會ふ人に向ひ神の御旨に就て語る覺悟を定めることである。何を言はんと思ひ煩ふ必要はない。其時いふべき事は聖靈が之を諸君に示し、而も其言語を祝福して用ゐ給ふに相違ない。

第二、又平生心がけて、脱りなく、凡ての機會を捉へることを努めねばならぬ。余は再び言ふ、神は諸君を導き給ふであらうと。さり乍ら苟くも機會のある時には、之を捉へて十分利用する決心がなくてはならぬ。嗚呼如何に多くの機會は不注意、油斷の爲めに失はれて居ることぞ。余は恐れる、我等は將來いつか、自ら省みて、其多くの善をなすべき機會を、仇に過したることを後悔しても及ばぬ日があるに相違ない。

否々將來いつかの話ではない。現に今日と雖も、大切なる機會を仇にしたことを

悔ゆれども及ばず

第三、深切な

後悔する場合が多くあるではないか。「なせ私は彼の時彼の人と電車で乗合になつた時、其靈魂の事に就て話をしなかつたか。」或は「なせ私は彼の婦人と道連れになつた時、一言救に就て語らなかつたか」など。折々後悔する様なことがあるではないか。

取分け、我等が信仰の事を話せば話せる筈の人に對し、其務を怠つて居る間に、其人が忽ち死んで此世に亡き人となつた如き例もあらう。かゝる場合に我等は深く心の中に嘆き。「ア、なせ私は機會のある時、彼の人を警めなかつたであらうか、今となりては最早取返しがつかない」と、残念に思ふ様なことがある。恐らくは神も亦審判の日に我等に對ひ「なせ汝は彼の時、其務を盡さなかつたか」と、尋問し給ふかも知れない。それ故我等は今から油斷なく、氣を付けて居ることが大切である。

第三、見ず知らずの人に話をしかけるには、無用の反對を惹起さぬ様注意せよ。

深切なる心と、十分の敬意を以て口を利け。さすれば人にいさゝかの悪感情を
與へずして、随分立ち入つた話が出来ものである。若し又それでも立腹する人
があつた場合には、只もう詫びてさへ置たら可のである。我等の主は眞理を宣べ
傳へたる爲めに反對をひき起し、終に十字架にかけられ給ふたことを記憶して、
どこ迄も忍耐せねばならぬ。

第四、確
實なれ

第四、それと同時に、折があつたならば、十分堅確に、又忠實に、人を救に導く
ことを努めねばならぬ。大抵の場合には自分の實驗を證言することにより、先方
の注意を惹起すことが多いものである。一體實驗談には非常に力のあるものにて、
殊に信仰を神に置きつゝ、謙遜に語り出づれば、大概聴く者の心に感動を起すも
のである。

第五、神
に頼れ

第五、いづく、如何なる場合にも、己を棄て只管神を力と頼み、神が我と偕に在
し給ふことを記憶して働かねばならぬ。時としては諸君の深切を無にし、其言ふ

種々の
生へぬ

所を拒み、嘲弄罵詈を以て之に報ゆる如き人があるとも、之が爲めに失望しては
ならぬ。そんなことは何んでもない。假令諸君は如何様の扱ひを受けても、若し
其語り出づる眞理さへ人々の胸に入れば、やがて其効能は顯はるゝであらう。諸
君が投じたる一掬のパン種は臙で膨れ出すに相違なく、又諸君が蒔きたる種は日
ならず芽を生じ、穂を出し、多くの果を結ぶ時のあるべきことを信じ。どこ迄も
力を盡さねばならぬ。歌に「早やかれ、おそかれ、凡て種蒔く者には、收穫の時
を與へたまふ。それが此世に於てならずば、やがて天國にて、必らず花さき果を
結ぶの時に會はせ給はん」とあり。諸君は希望を以て勉め勵まねばならぬ。
偕我軍人と、余が諸君に問ひたきは此事である。諸君は果して此の如き方法によ
り、貴き靈魂を追ひ求めて居るであらうか。若し果して然らば余は諸君を祝ひ、
主の名に由て諸君をことぶくであらう。往け、而して尙も其爲す所を繼續せよ。
さり乍ら、若し此の如く機會を捉へて主なる基督を證言することが、諸君の習慣

でないならば、余は諸君が神の前に過去の怠慢を赦されんことを祈り、以來は必ず注意して力を盡すべきことを約束せんことを勧誘する。而して今から直ちに之が實行に取かゝらねばならぬ。

(二二) 基督を證する事 (下)

余は前に諸君が其偶然相逢ふたる人々に迄も、救を教へ、神に對する務を警告すべき責任のあることを述べた。併し乍ら世には此の如き責任を重荷の様に感じ、大層實行し難く覺ゆる者も少なくない。それ故余は然ういふ人々を鼓舞奨励する爲め、今少し同じ題目に就て諸君に語り度と思ふのである。

其前に一言して置きたいのは、我等救世軍人が、總體としては別段内氣で遠慮勝ちで基督を證し兼ねるといふ人種ではないことである。否々彼等は「耳をつけて聽しことを屋の上に言ひ廣むる」ことを厭はぬ者共である。救を世界の極迄も宣傳へんことを望んで努力する人民である。

さり乍ら其救世軍人の間に於てさへ、心がけ一つでは、もつと大膽に基督を證し、更に多くの機會を捉へて救を紹介するの餘地がある。余は年中斷間なく、思ひ切

第一、何故基督を證せざるも世俗の風習に妨げられるれば也

つて世の救の爲めに戦ふ軍人の團結を見たいと熱望する。而して諸君が亦何れも此の如き軍人の一人たらんことを切望するのである。
第一、そこで先づ考ふべきは、何故人々が、もつと大膽に、思ひ切つて此大切な務を盡さぬかといふことである。

(一) 世には一般社會の風習に妨げられて、基督を證することを躊躇するものが多くある。世の所謂信仰家なるものは、通常其宗教を人の前に持出すことを憚らつて居る。彼等は信仰のこゝしいへば、唯或る神聖なる場所に於てのみ物語るべきもの、様に考へて居るのである。基督の愛と、靈魂の價値と、罪の赦と、天國の望等のことを、演車の中や、物置の隅や、食卓に對坐した時語る如きは、宗教の神聖を穢し、其有難味をそこなふもの、如く思ふ人々がある。恐らく救世軍人の中にも、かゝる間違つたる引込思案の人々の感化を蒙り、いつしか其惡風に感染したるものがないとも限らぬ。さり乍ら我等は何處迄もかゝる社會の惡き風習

不人情無慈悲の事

責任を知らざれば也

に反抗して起たねばならぬ。我等は自家の門前に神の律法を破り其恩恵をふみつけ、相率ゐて永遠の滅亡に墮ち行く多數の人々を見ながら、一言の警告をも加へずして之を見殺にする如き、不人情無慈悲の人であつてはならぬ。乃ち余が今諸君に推薦する如く、到る處、有ゆる機會を捉へて、出會す程の人々に基督を説くといふことは、これぞ彼等を右に述る如き危険より救ふ一つの有力なる方法である。我等は一般社會の良らぬ風習に妨げられて、亡ぶる世の人を見殺にする様なことがあつてはならぬ。

(二) 次に多くの兵士は、亡ぶる靈魂に對する己が本分を思はず、其爲め自然此大切な務を怠つて居るのである。彼等は罪人を救ふ爲めに働くべき責任を認めず、平氣で、氣樂に、彼等が地獄に墮ちて行く様を眺めて居る。年中顔を合はす隣人に對してさへ然うであれば、況して圖らず電車や、演車や、汽船にて、道連れになつた人々に救を説き、偶さか惡口の一言も聞く元氣はないのである。ア、

無頓着の爲め也

誤りたる丁寧深切

何んたる恐ろしき怠慢、又無思慮の所業であるぞ。神が今日此の如き人々の心の眼を開き給はんことを。

(三) 次に無頓着にして油断勝ちなることは、亦基督を證する機会を失はしむるものである。思ふに斯くして失はれたる機會は、永遠に失はれたるものである。未來永劫、二度とふたたび取返しをつかぬことを知らねばならぬ。

(四) 時としては誤りたる丁寧深切の爲めに、斯くして善をなすの機会を取外すことが少なくない。即ち滅多なことを言ひ出して其人の感情を害してはならぬと、用なき思ひやりの爲めに、多くの憐れむべき罪人の、暗黒に墮ちて死ぬるのを見過しにすることになる。元來宗教の問題は人によつては甚だ受けの悪いものである。さり乍ら之は何よりも大切のこと故、機會を捉へては、せめて一言なりとも彼等が永遠の生命に關する注意を促さねばならぬ。殊に之は救世軍人の爲すべきことにて、世間の人々も案外之を我等に豫期して居るのである。

心に疚しき爲め也

(五) けれども、それと同時に甚だ面白からぬ事情の爲めに、基督を他人に證し兼ねる場合がある。而してそれは自分自身の救が不確實である爲め、自然他人に之を推薦し兼ねることである。自分の靈魂上の容體が宜しくない時には、自ら人の前に心靈的の話をすることを躊躇するものである。假令其話相手は自分の不徳の不徳のことを、一切知らぬ旅人であつたとしても、少くとも茲に自分と神との關係を悉く知りぬいた者があつて、我が胸中を照して居る。それは即ち銘々の良心である。人は我が良心に疚しい所がある間は、決して思ひ切つて基督を他人に證する事が出来ない。例へば或兵士が他の人に向ひ、靈魂上の事に就て注意を促がし、之を救世軍の集會に誘はふとしても、若し其胸中に聲があつて、「それよりも先きに汝自ら其心と生涯とを正しくせよ、醫者自らを癒せといふではないか、何故他人の事に喉を容れる前に先づ自分の事に氣をつけぬか」と、此様に囁いたとしたら何うであらう。それ故己が良心に疚しき所あるは、基督を證し得ざる大なる

臆病なれば也

第二、救済の法如何

ウエスレの實驗

る原因である。

(六) 今一つ最もありふれたる原因は、唯何んもなく耻かしく、さまり悪く、氣おくれがして、見ず知らずの人々に救を語るのを躊躇することである。

第二、然らば我等は、如何にして此臆病未練の心に勝ち、基督を世の人に紹介することが出来るか。

(一) それに就て大切なるは、諸君が他人に救を語る機會のあつた時、大膽に進んで其十字架を負ひ、直ちに往て己が本分を盡すべきことである。

(二) かゝる場合に、いつそ黙つて居つた方が可らうといふ如き臆病な念に支配せられ、又は他人が何と思ふかといふ如き遠慮の爲めに妨げられてはならぬ。苟くも諸君の主なる基督を證する機會があり、靈魂を死より引戻す手づるがあつたならば、其場で直ちに之を捉へて力を盡すことが必要である。又聖靈が心の奥より自分を動かし給ふに非ずば、動かぬなど、言ふてはならぬ。ジョン、ウエスレ

彼の眞心は我に味方す

一は或時此點に就ての實驗を語つて言ふ様。自分は聖靈に動かされ、止むに止まぬ場合でなくば、人に話をせぬが可かと思ひ、其つもりにて實地に當つて見た所、倫敦行の途次、ヨークよりバーチツト迄の間、唯一人にも靈魂上の話をする事が出来なかつた。其故以來は此の如き考を擲ち、誰でも逢ふ程の人々に、處嫌はず基督を語る様にしたとのことであつた。其如く、苟くも人に善をなすの機會があつたならば、救主を證するに就ても、其他のことに就ても、それを其儘神の御命令と受取り、直ちに實行すべきものである。

(三) 又常に自分を全く神の御手に委ね、其言にも、行にも、只管神の嚮導と祝福を求めねばならぬ。

(四) 次に相手の人が假令どんなに無頓着にて、或は嘲弄罵詈を加ふる如き場合にも、其良心は常に諸君の味方をして居ることを見込み、其つもりにて話をするが可い。

敬意を以て物言へ

實行なる

(五) 又如何にせば最も有効に、他人を勧誘し得べきかを研究せよ。いつ誰と話をする時にも敬意を以て之と物言へ。殊に此世にて身分のある人を相手にするには、此心がけが必要である。

(六) 基督を證するに最も大切なる資格は勇氣である。而して之は實地經驗をつむに連れて養はるべき徳である。實行せよ、しばしば實行せよ、其上にも尙繰返し實行せよ。實行は又諸君に必要な智慧を與へるであらう。實行は諸君をして満足に、此大切なる務を盡し得るに至らしむるものである。

(三二) 世を離るゝ事 (上)

聖書には此世を愛する事と、神を愛する事とが、相反するもの、如く教へた處が多くある。使徒ヤコブは、「爾曹世を友とするは神に敵するなるを知らざらんや」(雅四〇四)といひ。使徒ヨハナは「此世或は此世にあるものを愛する勿れ、人若し此世を愛せば父を愛するの愛其うちに在るなし」(約壹二〇十五)といひ。使徒パウロは又凡て基督に従ふ者に對ひ「此世を出で、之を離れ、汚穢に捫ること勿れ」といふ様な聖言を書き録して居る。(哥後六〇十七)

之は如何にも嚴重なる命令である。然るに我等は現在、此世に住み、此世に働くものであつて見れば、如何にして此の如き命令を實際に行ふことが出来るであらうか。之は大切なる問題である。

第一、先づ注意すべきは、聖書にある「此世」とは、如何なる意味の語であるか

世を友とすること勿れ

第一、此世は何

といふことである。言ふ迄もなく、之は山や岡や河や海や野原などの如き天然世界を指して謂ふたものではない。神は天地創造の初に當り、萬の物の成蹟を見なはして「甚だ善し」と宣ふたといふことである。天地萬物に申分があるのではなくて、其間に住む人に言分があるのである。「此世」とは此地上といふ意味ではなくて、唯世俗の精神といふ意である。即ち此世の人の一般の心がけを謂ふたものである。眞正の基督の僕は、此世の俗悪なる精神を離れ、清き生活を營むべきものである。

第二、誤解を辨す

世を避る事非ず

第二、聖書の、此世を離れるといふ教訓と、取違へ易い事が二つ程ある。今少しく其説明をしたいと思ふ。

(一) 世を離れる事と、遁世とを一括に考へてはならぬ。昔から坊主だの尼だのといふ輩にて、此世を避けて山に入つたものも少なくない。併しながら山に入る人が山にても尙輕薄なる世俗の精神につきまとはれて、困却したる如き例も多い。

けれ共神は我等が此の如く世を避け遁れることを命じ給ふものでない。基督の御語に「爾曹は世に住へども世の屬にあらず」とあり。諸君は此世に要用の人間である、所謂地の鹽又世の光である。此世の救の爲めに戦ひ、苦しみ、もし必要ならば其爲めに死ぬべき筈の人々にて、決して世を遁れて所謂世棄て人となるべき者ではない。

(二) 世を離れるとは又、厭世家となつて、此世の務を盡すことを、五月蠅く、厭はしく思ふ様になれとの意味ではない。そんな眞似をして居つては忽ち今日の生計にも困却し、妻子を餓しむる恐のあるものが多い。さり乍ら眞面目に家業を精出して一身一家を支へるのは、少しも不都合の事でないばかりか、却つて神の聖旨に適ふことである。我等は厭世家となつて、毎日の仕事を手につかぬ様になる必要はないのである。

第三、然らば世を離れるといふことの、眞の意味は何であるか。

厭世家となることに非ず

第三、世を離るゝ世とは何か

世俗の情
弊は利己
なり

流行を追
れふこと勿
れ

(一) 世を離れるとは、此世の悪き行を離れることである。即ち酒を飲むこと、放蕩すること、偽りを言ふこと、其他不正直、不真面目なる凡ての行と關係せぬことである。諸君が若し此等の悪き行と關係を絶つて居ないならば、諸君は神を愛することも、亦天國の望を有つことも、出来ないものと知らねばならぬ。

(二) 世を離れるとは又、此世を支配する所の精神、即ち利己の念を離ることである。神の聖旨は己に克つことである、愛である。随つて利己主義の人は神に逆ふものとなるのである。

(三) 我等は又此世につける權勢、大望、名譽の如きものさへ、利用して基督の王國の爲めを圖り得る場合の外は、之を見限らねばならぬ。

(四) 我等は又世の流行と、其空しき榮華とを見棄てねばならぬ。眞の救世軍人たる者が、如何にして其時々流行する衣服など着飾り、世俗と歩調を合せて世を渡ることが出来よう。余には何うしても然ういふことを想像だもなし得ないのである。

(五) 我等は又此世の嬉戲娛樂を棄てねばならぬ。かゝる行は一概に罪とは言ひ難いかも知れない。さり乍ら我等が若し、世の人の神に逆ふて滅亡の道に進みつゝあることを考へたならば、何うしても彼等と一緒にぶざけた眞似などして、遊び戯れて居ることは出来ない筈である。汗流如雨、走馬行カヌカ人

(六) 我等は又金を偶像として拜むことを止めねばならぬ。救世軍人は「財貨を慕ふは諸の悪き事の根なり。」(提前六〇十)と信するものである。然るを如何にして、彼金の儲けの爲めにのみ生き存へる人々と一緒に、營利を自當の一生を送ることが出来よう。それは何うしても出来ない筈である。

(七) 世を離れるといふことは又、此世の政治問題にて神と其聖國の大事を度外に置き、只お互の利益をのみ争ふ人々の仲間を、離れ出でよといふ意味をも含んで居る。

拜金の人
さなるこ
と勿れ

第四、何故世を離るべきか

性情を異にするか故なり

第四、然らば救世軍人は何故世を離れねばならぬかといふに、其理由は至つて明白である。

(一) 之は救世軍人と此世の人と性質を異にする上から、萬止むを得ざることである。否寧ろ絶體必要のこと、謂はねばならぬ。二人若し相會せずば争で共に歩かんや。〔歴三〇三〕然るに此世の人の心の願と、救世軍人の生き存へて居る目的とが全く反對して居るものを、どうして調子を合せて共に歩むことが出来よう。彼等は其己の私より割り出だし、萬事唯「これ文儲かるか」とか、又は「これ文面白く目が出来るか」など詮議をする。併し乍ら我等は何事にも唯神の榮を揚げ、人の靈魂を救はんことを心かくるものである。かゝる次第故、救世軍人は此世の人の目的とする所に興味を感せず、其富にも、亦樂みにも心を動かさざるものである。

(二) 救世軍人は又、火を懐に抱きて焚かれざるものなき道理を辨へて、漫り

世に混する者は世に穢る

信仰の振由はざる理

に此世と混することを好まぬものである。歌に「我は長らく世俗の捕虜にてありしが、今は更に高貴なるものに目を定め、生命の樹の茂る所、乳と蜜との流る、國を慕ふに至れり。此世の有ゆる樂みは、我が靈魂の要求を満ち足らはしむること能はず」といふ様な語がある。而して之は我等が實際上の經驗でなくてはならぬ。

諸君は此等の點に於て、如何なる立場に立つて居るであらうか。諸君の中に神を知らざる友や、輕薄なる此世と調子を合せ乍ら、同時に神の恵を受け、又は之を保たんとことを求むる愚者はないか。それは到底出来ぬ事である。一汝等神と貨に兼ね事ふること能はず」といふてあるではないか。諸君の中には又神が遠くに在す如く覺え、其靈魂の安全も聊か覺束なき節があり、若し今日の儘にて暗い死蔭の谷を通ることになつたら、嘸や心細いことであらうなど、感じて居る者があるかも知れぬ。而して其理由は、全く其人々が此世に未練をのこして神の啓示を

腐縁を絶
ち切れ

受けそごなひ、神に抗ふ者と結んで其敵に嚮ふことの出来なくなつた爲めである
様なことはないか。

けれ共諸君が若し斷然神に逆ふ敵と絶交し、永久に此世に背中を向けて立つ覺悟
があらば、神は必ず來りて諸君を潔め給ふであらう。又諸君に愛と力と喜とを
満たし、罪と地獄とに打勝たせ給ふこと疑がない。
然らば諸君はなせ今直ちに此世との腐縁を立切り、身を神に献げることが出来
ぬか。諸君は此大切なる問題に對して何と返答するであらうか。

(三三) 世を離るゝ事 (下)

余は前に此世と混することの、悪しく且厭ふべき理由を説明し、我等が其惡き風
俗と絶ちて、清く自由なる靈魂を、保存すべきことを話したのである。

然るに又考へて見れば、諸君の中に或は「大將よ、私共は如何にして此世を離れ
ることが出来ませうか」と、問ひ度く思ふて居る人々があるかも知れぬ。なせか
といふに、世には輕薄なる世俗の風俗精神と關係を絶たねばならぬことを、萬々
承知しながら、之を實行し兼ねて居る者が至つて多いからである。

彼等は輕薄なる此世の風習を厭ひ、其無意味なる生活に倦み疲れて居る。それに
も關らず、倍思ひ切つて其間から出て來ること能はず、或は偶々之を出ても、ま
た忽ち後戻りして、所謂「豚洗はれて復泥の中に俯す」といふ如き醜しき態を演
じて居るものが多い。かゝる有様故、余が斯く世を離るべき事に就て説き明す間に

如何に世
を離るへ
き

豚洗はれ
て復泥中
に俯す

第一、二
心なる可
らす

一七〇
も、屹度「然らば私共は如何にして、首尾好く此世の悪しき習慣風俗と關係を絶ち、自由の人となることが出来ませうか」と、尋ねたい人々があるに相違ない。そこで余は今少しく其等の事を説明したいと思ふのである。

第一、先づ大切なるは、何から何迄悉く世俗と縁を切るべきことである。二、心であつてはならぬ。裏表、蔭日向があつてはならぬ。世には表面上世俗の風俗を棄てたる如く見せて、實は世俗の精神を其儘胸の中に蓄へて居るものがある。之は神の前に最も忌むべきことである。歌に「己が好める罪は之を差し置き、己が厭へる惡のみを戒む」とは、此ういふ人の事である。我等は世の人の虚榮を責めながら、自分の兒供には派手な姿をさせ、又其家庭に徒らなる流行を入る、如きことがあつてはならぬ。多くの母達は其子が成人の後道樂者になるのを見るより、寧ろ彼等が天死をする方が優であると考へるであらう。然らばなせ彼等を今から世俗の悪しき風俗に染まぬ様養育せぬであらうか。

世人は如
何に見る

世の人は諸君が、口に此世の輕薄なる風俗をどがめながら、實は自分にも幾らか之を真似て居る有様を見る時、諸君を輕蔑せざるを得ない。之に反して彼等が若し、諸君の本氣で世を離れ、全く其邪なる風習に與せざる有様を見る時、彼等は諸君の言に耳を傾け、又其模範に倣ふ様になるであらう。それ故諸君は全然此世の空しくして益なき流行、歡樂、嬉戲など、關係を絶たねばならぬ。

第二、旗
色鮮明

第二、其旗色を示せ。諸君は其世俗と縁を切りたること、又救世軍に屬すること等を、包まず發表せねばならぬ。之を屋根の上に言ひ廣めよ。其制服を着用し、機會があつたら其戰友と列んで立ち「どきの聲」を周圍の人々に賣り、又救の力を其知人朋輩の間に證言せねばならぬ。己が信仰上の立場を明らかにせよ。人々の反對や嘲弄罵詈を恐れ、其爲めに己が立場を曖昧にする様なことがあらば、それは恐らく、諸君が再び世俗の悪しき風俗に逆戻りするの手始となるであらう。注意すべきことである。

第三、警
醒を要す

所謂成功
の危険

世俗的の
交際を避
けよ

第三、又断ず自ら警むる所がなくてはならぬ、誰でも少く基督教の歴史を知る者は、其教會が幾度となく世俗の精神に打負け、鹽其味を失ふたる例のあることを認めるであらう。世俗の精神は實に基督教會の最も強く且つ恐ろしき敵である。氣をつけて此大敵を其初對面の時に撃退せらねばならぬ。中にも戒むべきは。

(一) 世の所謂立身出世を求むることである。此世の成功にあこがる、結果、全く世俗に化されてしまふ者は至つて多い。さり乍ら救は人を其靈魂上のみならず、亦此世の生活上にも益するものである。救世軍人の中には靈魂の救を得たるが爲め、つけて加へて其一身に大なる利得を受けたる者が少なくない。それゆゑ諸君は此世の立身出世よりも大切なるものあることを知り、此點から失敗つて再び世俗に後戻りせぬ様、十分警戒せねばならぬ。

(二) 次に戒むべきは世俗の交際である。多くの人々は此世俗の交際から、平生のたしなみが破れて再び惡に陥るのである。不信者と結婚したるが爲めに神を失

世俗の
樂を戒め

第四、基
督を紹介

ひ、合せて有益の生涯を送りそこなふたる男女に數へ切れぬ程多い。或は世俗的の人物と共同にて事業を營み、飛んだ禍に陥つた人々も少なくない。又は世俗的なる親類縁者に後髪をひかれて、切角志ざしたる信仰の道を迷ひ出づるものも多人数あることを憶えて、屹度覺悟する所がなくてはならぬ。殊に最も戒むべきは、彼の名ありて實なき所謂基督教者との交際である。

(三) 又世俗の娛樂、遊興等の仲間入をせぬ様注意せねばならぬ。避暑に行つて肉體上の健康は増したが、靈魂上には衰弱を來したといふ如き例も少なくない。油断してはならぬことである。

第四、又機會のある毎に、神を知らざる世の人に、基督教の宗教を紹介せねばならぬ。而して基督教の宗教が如何に此世にては安心と喜ぶを與へ、來世にては天國を與ふるものかといふこと、又自分が現在、如何に大なる恩恵を受けて居るかといふ様なことを、出くはず程の人々に告げ知らさねばならぬ。

第五、足
れる事を知

世俗を
戦ふべし

第五、最後に、我等は常に天に属ける富を有するを以て足れりとし、此世の浮いた事に心を動かさぬ様でなくてはならぬ。倍、我軍人よ、諸君は此等の點に於て、如何なる世渡をして居るであらうか。何か此世の榮華や、利益や、野心の如きものが、諸君を神から引離して居る如き事はないか。又は世俗が諸君の心の喜を奪ひ、其周囲の人々の靈魂に對する務を妨げて居る如きことはないか。注意して、此恐ろしき世俗といふ敵の所在を見届け、之と戦ふて、之に打勝たねばならぬ。而して昔の人が「處女なる女子シオンは汝を輕んじ汝を嘲ける」(王下十九〇二十二)といふたる如く、我等は輕薄なる此世の風俗を賤みつゝ、世を渡るものとならねばならぬ。

(二四) 勞働論

勞働は運
命なり

太初に神が天地萬物を造り給ふたる時、一しきり御業の成就する度毎「之を善と觀給ふ」たといふことである。此の如く我等も亦日毎の職業を營む上に於て、自ら省みて「之を善と觀」得る様な働き方をしなくてはならぬ。元來人は其使命と共に生れ落ちたるものである。随つて亦必らず其使命を果す爲めに勞働すべき運命を有するものである。我等は年中自らの爲めか、又は他人の爲めに精出して働かねばならぬ。或は財産や、地位や、權力を有し、勞働せずとも糊口に窮せぬからといふて、遊惰に日を送る如きは大なる心得違である。勞働は之に従事する者に威嚴を添へ、又之に榮譽を與ふるものである。人の肉體と又精神とは、之を使用せねば萎微して用をなさざるに至るものである。

善良なる
労働なる

労働は又幸福に世を渡る爲めに必要なるものである。元來怠惰は禍の本である。假令少々位病氣があつても、若し何か相當の務を發見して之を務むるに於ては、大きに心安く日を送ることが出来るものである。

我等は労働に従事すべきのみならず、亦善良なる労働をなさん爲めに力を盡すべきものである。神はいつも善良なる労働をなして居給ふ。前にも言ふ如く、天地創造の六日間にも、神は其日々の仕事の成績を視て「之を善と觀給ふた」のである。即ち神の能力と智慧とが、其出来あがりたるお仕事の上に現はれたることを見て、之を満足に思召したるものに相違ない。

我等が若し、天地創造の大昔に出来あがつた許りの世界を見ることが出来たならば、どんなに面白いことであつたらうか。併しそれは今更言ふた處で出来やう筈もないことである。さり乍ら我等は程なく彼の永遠の世界に移り、新しき天と新しき地とを見、正義は隈なく行はれて罪も悪魔も入ることを得ざる處に、限なき

神を
手本

第一、手
近き職分
を盡せ

命を嗣ぐべき樂き希望を有つ者である。

借我が軍人よ、諸君は神を手本として、毎日労働するのみならず、亦善良なる労働をなすべきものである。これは諸君が不斷の覺悟でなくてはならぬ。

第一、此心がけは毎日務むる家業の上に大切である。我が軍人の中には、其營む所の業務に不満足を覺えて居るものが少なくない。或はそれが自分で擇んだ職業でなく、全く、両親が取定めたものだからといひ、或はそれが自分の救はるゝ以前に取かゝつた仕事だからといひ、或はそれが何かの行が、り又は情實に驅られて着手したる營業だからといふ如き、さまざまの理由の下に、兎も角も我が今日の業務に不満足を覺えて居る人々が少なくない。さりとして一旦従事したる業務を今更變更することも仲々困難である。かゝる場合に何う處置をしたら可いかといふに、最も肝要なるは諸君が然ういふ境遇に於て、尙神に依り頼み、之と偕に歩みて、只管其榮を揚げんことを務め、現在の立場から其全力を盡すべきことである。

一七八
うする間に、神が或は何とか然るべき道を開き、満足を以て働き得る様仕向け給ふこともあらう。而して自分には假令急に商賣變へなどなし得ぬ場合にも、少なくとも其子孫には、神の榮を顯はすに最も適當したる職業を擇ますることが出来るであらう。

第二、諸君は又其爲す程の勞働は、これを最も善く爲すことを努めねばならぬ。これは亦天の父の模範に倣ふ所以である。或は田島にて、或は工場にて、或は店にて、或は事務所にて、或は家庭にて、其他いづく如何なる場所にて働く場合にも、諸君は自分に及ぶ限り、最善の力を盡して勞働する心がけが大切である。或は赤坊の世話をなし、或は汚れ物の洗濯をなし、土を堀り、帳付をなす等、其他神の御攝理にて自分に差向けらるる程の務は、それが如何なることであらうと、必ず一生懸命に、其最上等の努力をせねばならぬ。

第三、これは又小隊に對する務を盡す上にも當倣ふことである。諸君は其神に對し、又耶穌が命を棄て、迄も賤はんとし給ふ貴き靈魂に對して、負へる務を盡す上に、善良なる勞働をせねばならぬ。

余は救世軍人の中に、ひよつとすると、此世の主人に對する務には忠實を盡して居るにも關らず、天の神に對する務に至つては、之を一向等閑にして居るものがあることを恐れる。彼等は神に對し、軍隊に對し、其小隊に對しては、どんな勤め方をして置ても、差支ないと考へて居るもの、如く見える。

彼等が若し會館の世話を托せらるゝならば、雑と掃除をした丈にて。「會館が清潔になつて氣持が好いか、それとも不潔で氣持が悪いか、ごつちらかは知らねど、先あこれ位にして置けば申わけは立つであらう」と、言ふた風の働き方をする。

或は一吋集會に出席するにしても、度々時間に後れながら「や、これは復々遅刻した、併し高が五分か十分のことである、何、通常の野戦だもの、いつも定つた營内集會だもの、さうく規帳面なわけに行くものではない」と、平氣な顔にて